

たらいふかと思ふ。斯うした聯省自治の根本条件を見ると北支五省にはこれを欠く。まして現在は、人文の根帯において南京的勢力が北支に蔽ひかぶさつて居るのであるから、北支五省の聯省自治的政治プロツクは實現し得ないのである。

次に考へられるのは、北支の獨立政權であるがこれは……連想させる、たとひ日本が積極的に……したところで、たやすくはいかないいろ／＼な条件があるのである。即ち滿洲では、南京的勢力が滿洲に侵入する以前に日本がこれを絶ち切つた。然も滿鐵を中心にした日本の勢力（經濟、政治）は滿鐵沿線だけではあつたが頗る強固なものであつた。學良政權は寧ろこれに乗つてこそ、強固であり得たのである。然るに學良はこれを取り外して南京的勢力を迎へんとした。そこで日本が、學良等の上層政治家さへ、追つばらへば、その後に出來る政權は、嫌がおうでも、日本の勢力に乗るよりほかに途がないのであつた。獨立は容易に出來るべき素地があつたのである。然るに、北支ではさきの北支事件によつて南京の政治家は後退し、南京政府の政治機關の一部は撤退した。然るに、これ等が乗つてゐた南京的勢力は動搖してゐないのである。後に來るべき政權は、これに乗るよりほかに途がないのである。南京的勢力に乗りながら、ハツキリと南京政府に獨立的態度をとり得るや否や、これが現状においては、北支に反南京的政權の樹立が困難な根本の理由である。即ち北支における日本の勢力は、滿洲事件前に日本が東三省に有して居た如きものでなかつた。南京的勢力に比ぶべくもなかつたといふことを證明するものである。日本の有するものは停戰協定や駐兵權による

……が主になつてゐる。他國における政治勢力は武力による場合よりも經濟的勢力を占むる場合により大なることがある。經濟的勢力と政治的勢力とが結びついた場合に大きな底力となるのである。この底力を北支においては、日本はもたないのである。従つて、後に來るべき北支政權は反南京的勢力に乗らうにも乗るものがなく、殘存してゐる南京的勢力に乗つて只管日本の武力的脅威を拜み倒すよりほかない有様である。これが現在の北支政權であるのだ。北支の軍閥、たとへば閻錫山にしる、韓復榘にしる萬福麟にしる、商震にしる、關東軍の機嫌をとることを努めて居る。と云つて積極的に關東軍に身を投げ込むといふ態度はとらない。勿論投げ込んで來ても關東軍の中にこんなすれつからの舊式軍閥を推し立てて北支の收拾をやらうといふ考をもつて居る粗大漢は居ないだらうと思ふ。——北支軍閥が斯うした態度をとつてゐるのは、日本の武力的勢力にもたれかゝることを彼等の保身の途でないといふことを知つてゐるからである。彼等が頼りたい勢力は身に危険のない安定的、永續的、平和的な勢力である。こんな理想的な勢力は北支にないとしても、彼等が南京政府に對して白眼的態度をとり得ないのは、北支における南京的勢力に反抗することの危険を知つてゐるためである。

斯く見て來ると、北支には、日本で想像してゐたやうに、北支五省聯盟や、自治政權や、獨立政權が雨後の筍のごとく發生することは不可能なるごとく思はれたのであつたが、たがはず翼察政務委員會の出現となつた。とまれ、北支における今後の重大問題は、上層に乗つてゐる政權の色彩、性質の

問題でなくて、政權を乗すべき土臺の問題となるのである。即ち南京的勢力と日本の勢力の噛み合ひの問題である。日本がどれだけ経済的に、北支に進出するかといふ問題になるのである。平たく言へば、滿洲を通じて行はれる日本の投資がどれだけ北支を牛耳るか、北支における支那の新興資本團（浙江財閥）の勢力と、どんな關係になるかといふことになるのである。日本の資本力、経済力が北支に於ける浙江財閥の勢力を追つばらひ得るとすれば、その瞬間に北支には眞の獨立政權樹立の可能性が湧くことになるであらう。

一部では、今や、北支は、日本にとつては、特殊の地域となつたといつてゐるものがある。これは觀念的には正しい。國境は鴨綠江から萬里長城に移つてしまつてゐる。然し北支に於ける日本の權益經濟的、政治的勢力がその昔の東三省に於けるが如く底力あるものと思ひ込んだら大變なことになるのだ。茲に北支政權が日本の思ふまゝにならない原因があるのだ。

そこで北支政權を決定するのは、滿洲を通じてなされる日本の北支經濟進出即ち日本の資本力と浙江財閥の北支支配力との噛み合ひの結果によると見ていゝやうに思ふ。噛み合ひに勝つたら獨立政權が容易に出来るだらうし、浙江財閥と經濟合作をやつたら鶴的政權、負けたら抗日の連續だらう。

— 改造・昭和一〇・一〇 —

第五章 北支政權と銀問題

銀國有令と北支政權の相關

孔祥熙の銀國有令で得をしたのは北支の自治運動だつた。然し得をした時は大穴があいてゐたといふ何が何やらわからぬ事態の進展をしたものであつた。

銀の國有などといふ新事態が南方にて發生しなければ、北支の自治政權は、なか／＼早急には成立しない状態にあつた。寧ろ逆に蔣介石の切崩しの手が利いて、宋哲元を除いた北支の將領はますます消極的になつて行くといふなさない状態になつたのである。この分で行くならば、いつ天津軍、關東軍がカンシヤク玉を破裂させないとも限らぬ、といふような時にドカンと來たのが銀國有令で、これを契機として、北支將領の態度が少しは積極的になつてきたのであつた。いはば北支の自治政權の成立の機を促進したものは銀國有令であつた。といつても間違はないのだ、春秋の論法をもつてすれば孔祥熙、北支政權を樹立すといふことになるのである。有吉前大使が孔祥熙を詰問すると、彼は酒々として「これといふのも實は駐日大使の蔣作賓が故高橋藏相、兒玉總裁に勧められたもので、日本から抗議を受けるとは意外だ」と、銀國有令の動機が故高橋藏相案の如くいつてゐるのである。これ

をしも春秋論法によれば、高橋北支政權を樹立すといふことになる、春秋論法は意外なところに飛火して馬鹿げたことになるから、止すとして、もしこの國有令が支那全土に徹底して實現せられる曉には支那の地方政權はどうなるか、北支將領と蔣介石との關係はどうなるか、といふことを考へると、北支將領たるもの自若としてゐるわけには行かなくなつて來るのである。蔣介石の統治力は恐らく今の數倍になるであらう。北支將領は一舉一動蔣介石の機嫌をとりなければ立つて行けなくなる。さなきだに浙江財閥中心の南京の政治政策は、さらに露骨になるだらう。全支那の地方經濟は浙江財閥の膝下に完全に隸屬するといふことになり、自治政權など夢想もおよばぬ状態になるのである。

蔣介石は、今までは、山東の韓復榘、山東の閻錫山、河北の宋哲元等の北支の外様大名には、可なり遠慮をしてゐた、韓復榘あたりには可なりの我まゝを大目に見てゐたのである。これといふのも韓復榘が多くの私兵をもち濟南、青島の市場を控へ、そこにあるところの生銀を壓へ得るからであつた。大小は比較にならぬにしろ蔣介石に楯つく力をもつてゐる。これが蔣介石の願使に甘んぜねばならぬ直屬軍と地方に地盤を持つ外様大名との相違である。従つて銀國有令に服することは、北支將領自身が去勢されることになるのである。いやが應でも北支將領は自衛の方法をとらねばならぬではないか。

わが軍部の北支に對する見解は、この地域に蔣介石の政策に左右されない政權が出來なければ、日滿支の恒久的平和は實現されないと見てゐた。従つてこれを端的にいへば、南京と切り離されたる北

支獨立政權の樹立である。この希望の第一歩は、日本の實力で實現された、即ち昭和十年六月の天津事件、その結果として出來た梅津、何應欽の協定である。この協定によつて、南京系の官吏、軍隊の河北に入ることは、一應事前に日本側に相談せなければならなくなつてゐるし、反滿抗日の分子に對しては糾察權をもつてゐるのである。従つて、もし蔣介石の軍隊が、いやしくも反滿抗日の目的のもとに、河北に侵入する場合、日本は條約上の權利によつて軍隊を動かす得るといふところまで行つてゐるのである。

北支財政獨立の重大性

この協定によつて南京系の官吏、軍隊は北支から一掃され再び河北に歸ることは出來なくなつた。素人の考へからすれば、その跡には、南京政權とは、別個な政權が自然發生して、日本の希望する事態が北支に發生しさうに思ふのであつた。然るに事態はさうは動かなかつた。跡に來た商震にしろ、宋哲元にしろ、態度は頗るスロー・モーションであつた、これは何故か、といへば、蔣介石の手足は北支から一掃されても、蔣介石の威力は北支將領の上に残つてゐるといふ點からであつたのだ。なぜ威力が残るかといへば、北支の財政權は一から十まで蔣介石の手中にあり、青島、濟南、天津、北京の財界は八割までは浙江の資本であり、金融産業悉く蔣介石と一心同體の浙江財閥の支配に慣伏してゐる實情よりしてであつた。従つて蔣介石の賄を受けねば北支將領は立つて行かない、自賄にならな

ければ樓主の願使に甘んぜざるを得ぬではないか。

その上に蒋介石は北支將領を牽制するあらゆる手段をとつて、ガンジガラメに縛りつけようとした。先づ共産軍討伐の名を藉つて北支の隣接地帯たる陝西に十萬近き舊東北軍を送り、張學良を西安に駐在させることにした。即ち武力的睨みを置いたのである。ついで北支將領の大親分たる馮玉祥、閻錫山を南京に迎へた。宋哲元、韓復榘ともに馮玉祥の舊部下であり、商震、徐永昌、傅作義ともに閻錫山の部下である。馮、閻が蒋介石の味方となると、これ等の北支將領は馮、閻に矢を向けて蒋介石に反抗が出来なくなる特殊の事情があるのである。こゝに至つて、このまゝでは自治政權の出現は不可能となつたのである。

そこへ現れたのが香河縣その他における農民の自治運動であつた、これは運動自體としては白晝の花火のように消え去つたが、これが南京におよぼせる影響は可なり大であつたと見ねばならない。何となれば、これが標榜した最後の目的は「北支の財政獨立」といふ北支問題の核心を衝いてゐたからであつた。

「財政獨立」これこそ北支問題を解決する最後の切札であるのだ。これが出来ない間は、いかに宋、韓、商、徐を鞭撻しようが自治政權の出現は不可能であるといつていゝのである、と同時に、これを裏からいへば北支が、天津、青島の海關を押へ、一切の收稅機關を接取し、南京と切り離した通貨管理を行へば、自治政權は一日にして確立し得るのである。この消息が南京にわからないはずはない、

これか南京の銀國有の氣勢を煽つた一つの原因ともなつてゐるのである。

南京政府の銀國有が發表されたのは、實に抜討的であつたが、これが計畫されたのは、可なり早くからであつたと思はれるのである。北支の農民自治運動に刺激されて、いよゝ銀國有を實行せなければならぬといふ決心はついでゐた、たゞ、何時實行するかといふ時期が問題として残されてゐたに過ぎないのだと思はれるのである。その證據には北支において「財政獨立」のスローガンが擧げられると前後して、北支、殊に天津、北平の浙江系銀行には、密令が下されて、密かに在庫銀の南送が行はれはじめたのである。千元の現銀が集まるとこれを南送してゐた事實が後になつて發見されたのである。孔祥熙、茫洋として大人の風あるけれども、何と用意周到な男ではないか。

在來北支の銀は、銀行の持銀、約七八千萬元の見當であつた、このうち天津、北平の在銀が六、七割の見當と見られてゐた。従つて天津、北平の在銀は五、六萬元見當となるのである。然るに、南京の銀國有令に反對して、北支當局が實際に手を下して見ると二千百萬元しかなかつたといふのである。残りの二三百萬元は何時の間にか上海に送られてゐたといふ、この早業は、孔祥熙が近く銀國有令を實施する覺悟があつたことを如實に證明する事實である、かうして見て來ると、南京政府の銀國有を刺激したものは北支の農民自治運動のスローガンであり、北支自治政權の成立を促進したものは南京政府の銀國有令であることになり、因果はめぐつてゐるのだ。

早生兒としての北支政權

さて、南京の銀國有令によつて北支將領の自治政權樹立の氣勢は促進された、促進されたことまでは事實であるがどの程度に促進されたかといふ程度の問題になるとあまりバツとしないのである。北支の財政が完全に獨立するまでは將領の態度は曖昧たらざるを得ない事情があるのである。果して南京政府を向うに廻して、蔣介石と太刀打ちするだけの勇氣があるかどうか、宋哲元のごとき猪武者でさへも、蔣介石と氣脈を通じてゐる。自治政權樹立についてさへ一から十まで蔣介石の指示を仰いでゐるといふ情ない状態であるのだ、今こゝに、南京とは一脈相通じながら北支自治政權が曲りなりにも成立したとして、これが存立は、一に財政權の確立、即ち關稅、鹽稅等の收稅機關の接收、銀の保有にかゝつてゐるといつていゝのだが、宋哲元あたりの上述のような態度で、思ひ切つて、これ等を接收する荒料理が出来るかどうかといふことも懸念されるのである。

只一つこゝに大なる役割をなすものがある。即ち日本の力である。抜き討ちに實施された銀國有に對しては軍部は勿論外務省も、日本上下これに對して反對の態度をとつた。これと前後して南京政府部内に起つた強硬論、これは蔣介石「リリース」スロス會見後に起つた支那外交當局の對日強硬態度、五全大會豫備會議の席上（勿論祕密會議）にて行はれた蔣介石の對日主戰論、對日主戰論者の馮玉祥、對日強硬派の故胡漢民の起用説、上海における排日テロ事件等によつて證明され、日本の對支態度もさ

らに硬化したのである。さらに日本の軍部を刺激したのは蔣介石が隴海鐵道沿線に兵力を集中したことであつた。蔣介石が北支の自治政權に對し兵力をもつて彈壓する決心をしたものと思つたのである。そこで關東軍、天津軍は勿論日本の中樞も緊張したのであつた、中央軍が若し河北に入る場合は梅津何應欽の協定を楯にとり、山東に入る場合は濟南居留民の現地保護を行ふ決心をしたのである。實はかうする以外に北支を兵亂から救ふ途はなかつたのである。この日本軍部の重大決心が蔣介石および北支軍閥の心に反映しないはずはない、そこでどうなつたかといへば二重の意味において、北支政權の成立機運を促進したのであつた、蔣介石に對してはもし北支出兵をやれば、日本と全面的衝突を覺悟せねばならなくなつた。これは極力避けねばならない自己政權の足元が危くなる藝當である、そこで彼は一方對日外交の緩和を圖り、北支政權に對しては妥協的態度に急變したのである。ある程度までの自治は許さねばならぬと覺悟したのである。彼が五全大會で（昭和十年九月十九日）行つた外交演説を見るとその間の空氣がよく判る。「彼は主權を失ふことは絶對にいけないがそれ以外では平和のために便宜な手段をとつて、國難を切り抜けねばならぬ」と高唱してゐる。これがまことに意味深長である。

ふり返つて、北支新政權の宣言として傳へられるのを見ると新政權は中華民國の主權は否定してゐない、あくまで地方自治の形式をとつてゐる。蔣介石と北支將領、相呼應してゐる證據ではないか、また日本の重大決意は、北支軍閥ことに韓復榘、商震、徐永昌等に安心をあたへたことも事實である。

彼等は蒋介石の決意次第ではたゞちに中央軍の攻撃的となる地位にあるのだ、然るに萬一の場合日本が直接出兵して領域を護つてくれるといふ確信が出來た。

かくして、北支政權は、南京とは離脱せず、然して北支を一特殊地帯とするといふ頗る穩的形式で發生する、いはゞ早生兒に過ぎなくなつた。この早生兒が上述二百萬元の準備銀をもつて、通貨管理を行へるかどうか、こゝに至つて、滿洲國中央銀行に浮いてゐる一千萬元の現銀と非戰地帯に自由活潑に流通してゐる滿洲國紙幣が、意外に大きな働きをすることになつた。

—エコノミスト・昭和一〇・一二—

第四篇 日支外交の検討

第一章 蔣介石と對日外交の二重性

蔣の兩馬制御策

過般汪兆銘氏と有吉前公使と會見した時に汪は有吉前公使に相當な言質を與へた。そして二三の事實を示すことを約束した。有吉前公使が日本に歸つて日支外交好轉を説いて樂觀してゐたのはそのためである。だが汪がいふように、また有吉前公使が期待したやうに日支關係は好轉に向つてゐたかどうか、汪兆銘のいふところが南京の綜合された意見であつたか、汪の主宰する外交部の意見であつたか、その點われらは多大の懸念をもつ。かくいへば一國の外交部長の立言が一國家を代表せぬわけはあるまいと日本の讀者は疑ふにちがひない。が、こゝが目下の日支外交の最も重大な一點のように思ふ。モスコウの外交が常にコミンテルンの理想政策と聯邦政府の實利政策との二重性をもつてゐると同様、過去の南京政府の對日外交政策は、外交部と立法院と黨部とがそれぞれの對日外交政策なるものをもつてゐたのである。この外交政策の二重性が過去の對日外交をして變幻極まりなきものとした、

従つてわれ等は南京外交部長のいふことは最後の信用を置けないものように考へた。日本の外交官がこの外交部の背後にある複雑性をオミットして、ひたすらに外交部長を相手にして對支外交を進めたために手痛い目に遭はされた幾多の實例を私は見てゐる。日本の對支外交が最もなやまされたのは實にこの南京の二重性であつたといつても差支へないのだ。そこでこの二重性の實像を探ることが目下の南京政府の對日政策の源泉をつきとめることとなるように思ふ。蔣介石、汪兆銘、黃郛、孫科等の個人の意見や、相對した時の外交部長の話しぶりで南京政府の外交の方向を推測することは危険の上もないといふことを確言しておく。

南京の内部を見ると對日外交については二つの相反する勢力が對立してゐる。一つは日支關係を整頓して日本からのあらゆる意味の脅威を逃れようとする實利外交政策を立前とする一派と、一つは聯盟依存の原則外交政策をもつて、あくまで反日的工作によつて日本に對抗せんとする一派である。前者を代表するものは汪兆銘、黃郛、唐有壬らのはゆる親日派、これは多くは一時は外交の當局者であつた。後者を代表するものは宋子文、孫科、孔祥熙らのはゆる親米派で、これらは多くは浙江財閥または廣東に根をおく財政關係の要人である。この兩派を二股にかけて、巧に自己の地位を保ちつつあるのが蔣介石である。従つて蔣介石はある時は親米排日派を重視し、ある時は親日派を利用して、自己の政治的勢力の強化をはかりつつあるが、この南京の外交政策の二重性こそ一面からいへば蔣介石の政治生命の動脈硬化を防いだ重大な要因となつてゐる。早い話が一方において汪兆銘が有吉

新

前公使をとらへて「日支外交整頓、日本と支那との關係を歐洲大戰前におけるドイツとオーストリアとの親善關係まで進めたい。蔣介石もあくまで親日政策を支持してゐる。」と、日支の親善政策を吹き込んでゐる間に、御本尊の蔣介石は南昌において「わが支那を侵略せる日本に對し復讐するのは支那の軍隊全部が統制ある國軍となることにある、目下の支那が有する兵員が全部國軍となつた曉は、滿洲の失地回復のごときは期して待つべきである。私は失地回復の決意を有する。」と、豪語して民衆を嬉しがらせてゐる。これには多くの對内政策が含まれてゐようけれども、一方において日本に對し敵對意識を明瞭にして民衆を煽動し、親米反日派をひきつけておきながら、一方においては汪兆銘、黃郛兩氏を支持して日本に對して働きかけてゐたのだ。この端倪すべからざる蔣介石自身の二重性こそ、實をいへば日支外交の痛となつてゐたものである。日本では蔣介石の心理を幾様にも解釋してゐる。外務省あたりや國民黨に多少の關係ある老支那通の間には、蔣介石の眞情は日本と提携したいのだ。彼は親日である。しかし支那の國民的感情がそれを許さないのだ、と自分に都合よく解釋してゐるものもある。蔣介石はこれを聞いてニヤリと笑ふであらう。私には彼の會心の笑顔さへ想像が出来る。この際私はハツキリとしておきたいが、蔣介石は日本で考へるような單純な男ではないのである。一體支那の對日感情を今日のやうに導いて來た張本人は誰であるか、また滿洲に對して日本が手を下さなければならぬほどに張學良を煽動して排日をやらせた本尊はどこに居る、これを誰が蔣介石でないといひ得るであらうか。一言にしていへば蔣介石は排日家ともなれる、親日家ともなれる。

しかも何れも仮面である。彼には自己の地位を強化するためには共産黨ともなり得る要素があるように見える。彼は馮玉祥の機會主義を罵倒する、しかし眞底においては彼は馮を笑へないであらう。

蔣の對内工作の進展

蔣介石の對日外交をつぶさに見ると、彼は常に二頭の馬に乗つてゐる。いはゆる排日派と親日派との二頭を巧にたづな捌きをして一寸の隙のないところに彼の政治家としての卓抜せる技能を見るのである。従つて彼はどこまでも冷靜な政治家であるといふことを忘れてはならない。彼の眼には抗日も親日も保身の道具としてのみ大きく映る。たゞ明確にいへることは感情的にはあくまでも日本に對抗意識をもつてゐる。永久抗日を志してゐることであらう。しかし排日が彼の地位強化に都合の悪い客觀情勢が生れると彼は容易に表面親日にも轉向し得る。こゝに彼の政治的彈力を見るのである。

現在の南京政府の内部關係から見ると蔣介石は確實に、獨裁政治を行ふ實力をもつてゐる。また現に差支へない範圍においては、獨裁政治を行つてゐるが、對日外交に關する限り絶対に獨裁をさせてゐる。政策的には排日の旗幟も鮮明にしない。また外交常道化の政策も明示しない。例へば、汪兆銘や黃郛を使つて一方親日政策をチラ／＼とのぞかせながら、一方宋子文、孫科らの親米排日派を支持してゐた。また一方では汪兆銘、黃郛兩氏をして有吉前公使や關東軍當局にいゝ顔を見せさせながら、一方ではライヒマン、モネー、宋子文、孔祥熙、孫科等の排日活動を援け、民衆に對しては時折り自

重をすゝめるかと思へば、失地回復、永久抗日を囑語する。この蔣介石の對日政策の二重性に對して日本はどうすればよいのか、この南京の二重にも、三重にもなつた複雑な對日外交を相手にした日本の外交が徒らに袖手傍觀、靜觀主義を余儀なくされたのは無理からぬことであつた。然るに最近に至つて二つの外的條件によつてこの南京の對日外交の二重性が薄弱となり、蔣介石の地位にも排日派を抑へる方が有利となつて來た、こゝに今回の對日外交好轉説の強味があるのである。二つの外的條件とは何か、一つは南京政府に對して常に反對派勢力の根源となつてゐた廣東勢力の凋落と、英、米、露の日本壓迫期待に對する決定的幻滅である。最近數年來南京政府に巢くふ排日派は常に必ず廣東と脈絡をもつてゐた。廣東の勢力をバックとして策動してゐたものだ。それが廣東人たると浙江人たるとを問はず、いやしくも現政府に志を得ずまた現政權の樞要な地位にゐても蔣介石勢力の伸張を悦ばぬ手合は悉く廣東と通じ、排日の口號を高くして民衆を煽動し、民衆のバックによつて自己の背後の勢力を補はうとしてゐたものだ。端的にいへば廣東こそ排日の淵源だといつてよかつたのだ。廣東地方それ自身に排日運動はなくても蔣介石を支持してゐるところの浙江財閥と對立關係にある廣東派が蔣介石乃至浙江派の政權確立を妨害する道具は民衆に絶對支持を得る排日よりほかなかつたのである。在來の廣東は、彼の眼にはかなり大きなものに映つた。彼の眼前に横はつてゐる大きな障害物は國內的には共産黨と廣東とだけであるといつてもよい。これさへ始末すれば彼の獨裁政權樹立の夢は完成されるのである。従つて廣東を完全に壓迫し得る實力をもたなかつた蔣介石はある部分まで廣東派の排

日主張に迎合することが彼の保身の道である場合が多かつた。彼が排日派を支持し、また同時に親日派を支持して遺憾なく二重性を發揮しつゝあつたのはこれがためである。然るに福建事件を契機として蒋介石の廣東に對する睨みは著しく利けて來た。目下彼が企圖しつゝあるところの廣東に對する武力工作準備が著しく廣東當局を畏怖せしめてゐるのだ。近い將來の廣東はそれが中央から武力によつて叩かれるか、あるひは蒋介石の政治手腕によつてがんぢがらみに縛られるか知れないけれども、いづれにしても反蔣勢力としての機能が著しく低下して來てゐるのは事實である。この事實が蒋介石の對日外交の傾向に著しい影響を與へてゐる。實は今回の對日外交に好轉的な現象がありとすれば、この事實を基礎としてゐるのだ。即ち、蒋介石の政治的立場は、端的にいへば、排日派から親日派支持に重心を移しても差支へなくなつて來た。むしろ彼の完全なる獨裁政權樹立の夢を現實にするためには當分日本との關係を波靜かにしておいて對内工作に全力を注ぐべき潮時となつて來てゐることを痛感してゐるのである。

蔣の「以夷制夷策」と日本

さらに視角を變へて見ると、蒋介石の對内的第一段の準備工作はほゞ思ふ壺にはまつて來つたことだ。即ち彼の第一段の目的は反蔣武力の撲滅にあつた。しかして無敵軍隊の把握にあつた。彼は共產軍を討伐しながら如何にも共產軍による國家的崩壊が近づきつゝあるかのごとき危険信號をかゝ

げ、その討伐に身命をなげうちつゝあるかのごとく見せかけてゐる。共產軍を極度に恐れてゐる浙江財閥からはあたかも十字軍的英雄視されながら自己軍隊の強化をはかりつゝあるのである。彼の指揮する共產軍包圍軍の實力をもつてして、もし彼が眞劍に討伐を急ぐならば共產軍の討滅は傳へられるごとく困難でないのである。彼は共產軍討伐といふをとりを使つて自己軍隊の裝備を完成しつゝあるのだ。この彼のトリックは見事に成功して彼の直屬軍隊は數において、裝備において、もはや反蔣軍閥の存在を無視するまでに至つてゐる。福建事件における中央軍の成功はこれを十分に物語る。この關係は直に中央と廣東との關係ともなる。即ち今や廣東は武力においても政治勢力においても蒋介石に頭が上らなくなつてゐる。その實力は南京政府成立以來今日ほど確立された時代を見ないのである。かくのごとく蒋介石が反蔣派に對し氣兼ねする必要がなくなつたといふことが南京政府の對日外交好轉の一要因となつてゐるようにも見える。即ち政權を握つてゐるもの身からすると自己の國內的勢力に自信のない場合は外交問題によつて民衆の眼を外に向ける。自信が出來ると外交の波瀾を恐れる。蒋介石は前者から後者に移る過程にあるように見える。——こゝに私は重ねていふが南京政府なり蒋介石なりが親日に轉向しつゝあるがごとく錯覺しては大變である。要はたゞ排日的工作が日本の怒りを買ふのみで南京政權の現状では都合が悪くなつたといふことのみである。排日に對する日本の怒りがなまぬるければ排日はいつまでも續けられることは明言しておく。

南京政府なり蒋介石なりの對日工作にさらに一つの影響を與へてゐるものは、「日本の東洋におけ

る頑強さ」である。今日ほど「日本の頑強さ」が支那に感ぜられる時代はなかつた。ある程度まで支那人は——勿論南京政府の日本通も——排日は日本の産業に致命的な打撃を與へ得るものと確信してゐた。直接交渉を頑張れば兩三年ならずして日本の國論は分裂し日本の政治的危機を招來し得ると信じてゐた。國際聯盟や九ヶ國條約に期待を失つた支那も、日本の國際的孤立によつて英米の迫力が東洋において著しく伸張するものと期待してゐた。然るにこの期待は悉くはづれた、日本は幾多の不利なる條件にかゝはらず東洋における強國としての貫祿を各種部門において明瞭にしてゐる。在來の南京が考へてゐたような日本ではなかつたことが漸くわかつて來たわけである。在來の日本は英米に對する軟弱外交によつて國を保つて來た。英米に追隨することによつて實際には國家をもちこたへた場合が多かつた。これは國力が弱かつたためにやむを得なかつたのだ。しかし近來の日本は日本が氣づかぬ間に東洋においては英米の壓力を受けないほどの國力を蓄へてゐたのだ。英米に追隨しなくても日本は十分なる自信をもつて立つて行くといふことを聯盟の脱退で知り、近くは天羽聲明で覺つたわけだ。これが十年前の日本であつたならば世界の袋たゞきに遭ふはずであつたのだ。天羽聲明のごときも一時の波紋は起つたけれども對支問題に關する限りいゝ結果をもたらしたことを確信する。日本は東洋に關する限り英米に對して軟弱なる外交を續けないといふことを南京に對し明瞭にしたからだ。南京政府の傳統政策である英米の力を藉りて日本を攻めようといふ以夷制夷の政策は今日に至つて大して有効でないことが的確に南京政府の要人の胸にも響いて來つゝある。

かうした日本の東洋における地位が、南京が想像した以上に「頑丈」であつたといふことが蔣介石をしていはゆる親日派に重心を移さしめつゝある重大な要因のように思ふ。従つて、今回の南京外交の好轉の事實がありとすれば、それは背後におけるこの二大ファクトを基準として回轉し初めてゐるのだ。これを日本の對支親和的態度や、外交上の技術によつてもち來されたものように見ることは大きな錯覺である。だから、われ等がこの際最も考へなければならぬのは南京外交の好轉はどこまでも蔣介石をはじめ南京政府の實權者の御都合による擬態であつて、在來日支外交の痛腫となつてゐる對日政策の二重性は依然として續いてゐる。この二重性が生殘つてゐる間は政策の重心は都合次第で排日とも、親日とも變幻自在であることだ。

第二章 蔣介石の對日外交と日本の對支外交

蔣のパーソナリティと外交の相關

内政は勿論、外交、財政その他のあらゆる部門に亘つて、今の南京政府は完全に蔣介石の統制下にある。端的に言ふと南京政府は蔣家の執事群でさへあるのだ。その頭に故胡漢民がなつたり、汪兆銘がなつたりした。南京政府の内部の争ひは、要するにその頭を争ふて蔣介石の信任を得んとする運動

でしかないのだ。

スターリンは、冷酷にして峻厳な組織の上に立ち、ムツソリーニは集團の力を背負つて立ち、ヒッ
トラーは國民的氣勢の上に立つてゐる。蔣介石は私兵と私財の上に立つ。蔣介石が浙江財閥の重要な
構成分子でさへあるからだ。そこで蔣介石の獨裁力を總括的に見ると、蔣介石の氣隨氣儘で、南京
政府の政策は右にも往けば左にも行く。その振幅は、前三人の獨裁者に比して、遙かに大きいと見ら
れるのである。蔣介石個人の利害打算や感情で、一國の政策が順逆流轉するのである。勿論南京政府
の外交政策も此の例にもれないのである。蔣介石個人の利害得失や、立場といふものが南京政府の外
交方針を決定して行くのである。これは近代國家にはあり得ない。近代國家では聊かなりとも國民の
總意といふものが外交政策に反映してゐるのである。従つて近代國家相互の外交は、國民の總意や、
政府内部の情勢や、經濟、社會の關係等を考慮に入れて、算本を置いて行けば、可なり實情に即した
外交が出来て、略ぼ外交關係の歩く路線の見當がつくのである。そして一度定められた外交政策は可
なり明瞭であつて、その政權が続いて居る間は、特殊の事情が発生せぬ限り急速な變化はしない。
然るに支那では、そうでない。蔣介石の氣のもちかたでどうでもなるといふのである。そこで、列
國の對支政策は、蔣介石のパーソナリティを考へ、蔣介石の立つ地位を考慮し、蔣介石の利害その他
彼れ個人の周圍を考へて見て、立てられなければ、有効でないのではないかと考へるのである。

對支三原則の内容

こんな時代錯誤は、日本は嫌ひである。外務省は勿論、日本人の一般の外交理論は、こんな時代錯
誤を好まない。いやしくも東亞の安定勢力をもつて、許すところの日本が、蔣介石個人を目安にして
外交を行ふときは、國民の氣品とモラリティが許さないのである。また個人を對象とした外交で
は、安福派全勢時代段祺瑞を援けて日本は大穴を開けて居るのである。

斯くのごとき苦がい経験と、東亞の安定勢力としての理想を有する日本にとつては、梟雄蔣介石を
相手として外交を行ふなど出来ることではない。此處に悲しい現實の相違があつて、これあるがため
南京政府と日本政府の外交はウマク調子が合はないのであつて、何處迄も平行線が続けて行くのであ
る。日本の國民的理想と、蔣介石の極端なる現實主義が、相一致しないのである。そこで蔣介石が理
想を抱くか、日本が現實主義になるか、この二ツ以外に、ウマの合ふ機會は一寸あるまいと思ふので
ある。

最近日本では、外務、陸軍、海軍の三省で對支政策の三原則が決定した。第一は南京政府の歐米依
存の政策を根蒂から捨てさせやうといふのだ。第二は排日を根絶し、日滿支の提携を實現せしめ、第
三は外蒙を通じて行はれるソヴェト・ロシアの赤化共同防衛を圖らうといふのである。この申し合せ
が出来て日本の對支政策は統一が出来た。今まで、言はれて居たやうな對支政策の不一致が救はれた

——と思ふのは非常に甘まい。少しも救はれては居ないのである。といふのは、日本の不一致は何もこんな目標の不一致ではない。日本の對支目標は明治この方決まつてゐる。日本と支那との間にいゝ關係が出来て、日本も榮え、支那も榮え、といふことが日本の對支方針の根本義である。排日を止め、赤化を防止し、歐米依存をやめさせやうといふのも、皆んなこの根本義より出發して居る。この目標はずつと前から決まつてゐる。然るに日支の關係はちつともよくなならない。これは何故だらうか。この根本義、または對支政策原則なるものは、多くの場合、經文に似たものである。美辭麗句が連ねてあつて、日本人の道義感を満足せしむるものがあるばかりで、外に何にもないのである。この經文が決まつたばかりでは何にもならない。要は、これを實現せしむる方法がちつとも考慮され計畫されて居ないからである。三原則は決定した。然し、これを實現せしむるための手段として一局は一局の路をとり、他局は他局の路を行き、第三局は第三局で別なことをするといふことになる。一體何のために三原則が考慮され決定したかわからないといふことになるのだ。三原則は申し合されても、これを實現せしむる手段方法について實踐的の申し合せがなければ駄目ではないか。或者は一ツのプランを立て、これが實現を圖つてゐる。他の者は他の者で一ツの見透しを立て、スペキュレーションをやつて居る。其の外の者はまた別に獨善的態度をとつて居る。三原則は決定しながら、然も、これを目標として行く關係者の手段方法が揃はないといふことでは、對支外交の惱みは絶えない。

對支外交を統制し得る者は誰か

これに對し南京政府の對日外交は、前にも言つたやうに、蔣介石の氣のもち方一つで動く。完全に統制された形に於いて表はれて居るのである。南京政府の内部を見ると、親日的あり、排日的あり、歐米派あり、親露派あり、また現政權汪兆銘反對のための排日派あり、黨部は黨部に、立法院は立法院に、軍部は軍部に、それ／＼對日政策なるものを持つて居る。南京政府の對日外交の内部事情は日本以上に複雑多岐であるが、これが外に表はれる場合は、可なり統制された一元的形において現はされるのである。蔣介石の統制力がそれだけ強いといふことを物語るものである。

蔣介石はこの内部の事情を巧妙に利用して居る。日本の壓力に對しては親日派を差し向け、其の弱點に對しては、いつでも排日歐米派の起用を用意して置く。一方親日派の汪兆銘を重用視するとともに、一方には、これと政治的立場を異にする孫科や、宋子文、孔祥熙の歐米、親露派を重用するのである。その時／＼に應じて、親米政策もとり得れば、親英政策もとり得る。排日、親日、その時に應じて自由無碍の圓滑さをもつて豹變自在である。これは日本から謂はしむれば決して誠實なる態度ではない。遊女の手練手管に類するものであるが、南京政府の對日政策は、常に蔣介石の意圖によつて自由に動かし得るといふ、すばらしい統制ぶりを發揮して居ることには驚嘆に價ひするのである。そこで、顧みて日本の状態を見ると、頗る變な氣がするのである。例へば、日本の對支外交を統制

して行かねばならぬ人物であつた岡田首相を取り上げて見やう。岡田と蔣介石の比較——これは標準が異ふから比較する方が無理だが——少くとも外交政策の統制といふ點のみから見ると、岡田にタガは無かつた。岡田が日本の對支外交を統制して、虚々實々蔣介石と立ち合つてゐたといふ形跡は微塵もない。では廣田はどうかといへば、軍部三分に、重臣七分の兼ね合ひで、廣田外交といふ名前だけは何だか重厚だが、實體は乏しい、日本の對支外交を統制するために、力を盡して居るかといへば、餘りそうでもないのである。

そこで、日本の内部には、Aの支那觀もあり、Bのイデオロギーもある。CはC流に對支政策を考へる。強硬論もあれば、自由主義的な考へ方もある。南京政府の内部に劣らぬ位の多様性をもつてゐるのである。然るにこれを自由自在に統制する人が居ない。その結果はどうなるか、AはAのプランを進め、BはBのスペキュレーションを行なひ、CはCの見識を實行するといふことになるのである。甚だしきに至つては各々出先と中央との意見がチグハグになるといふこともあるのである。「そんなブザマなことは絶対にない」と誰れか本気で抗議して下さるなら、僕は幾らでも實例を擧げて説明して見せて上げる。

蔣中心の外交はアナクロニズムか

物、または事象に對する見方は、各人々々に見識がある。支那に對しても勿論そうだ。對支三原則

を實現する手段方法に就いても、AとBには、それぞれ異つた見方や、異なつた考へがあるのは免れないことである。Bは一から十までAから指圖されるのは嫌だらうし、AはAでBに牽制されるのを好まない。何れも所信に向つて邁進するといふ勇ましい結果になるのである。そこで斯ういふ勇ましい結果になることを防ぐ方法として残されてゐるのは、三原則實現の實際手段を細密に、具體的に決定して置くか、これを統制する蔣介石の人物を求むるかの外には途がないやうに思ふ。内閣總理大臣が確かりして、嚴密な統制力を持つてゐる人物ならいゝが、現在のやうに、内閣は、弱體であればあるほど永續の可能性があり、總理は各省大臣の緩衝地帯か、午餐會の座長の役目しか果してゐないやうな現在の有様では、これはなか／＼望めない。

蔣介石個人を相手にして、外交をやれと言へば實に時代錯誤で、聞くに堪えない。蔣介石を非常に買ひ被ると非難されるかも知れない。然し今の南京政府の外交が、全く個人によつて左右されてゐるといふ現象を見れば、外交の手段は蔣介石に止めを刺すよりほかないやうに見える。民衆の要望とか、國家大衆の利益などといふものが、個人の都合の前には平氣で蹂躪されて居る實狀にある支那に對して、近代國家同志の外交理念をそのまま實行することが、いかに空疎であるかといふことを言ふのみである。日本の對南京政府外交が、在來何んだかピツタリいかなかつた理由は、此の邊にあるのではないかと僕は思ふて居る。そこになると、立場は異つてゐるが、英國の在支外交官は、可なりこの點を心得てゐたやうに思ふ。現大使のカドガンはどうか知らぬが、前公使のサー・マイルス・ランプソ

ンなどは、此の種の外交をした一人のやうに思ふ。彼は蒋介石や張學良に喰ひ入つて、これを操縦しながら、外交問題を實際的に解決して行つたのである。ランブソンは非常な常識的な男で、可なりの現實主義者であつた。蒋介石また世界一の現實政治家であるとすれば、兩者のウマはよく合つて、消化不良の殘滓が溜らない。そこでランブソンの外交は、成功であつたといはれるのである。

南京の對日外交を底流する思想

卒直に言へば、日本と支那との外交關係は、純然たる對等國の外交ではない。支那は經濟力においても、文明の點においても、軍備の點においても、政治組織の點においても、日本に比較すると遙かに遅れて居る。南京の政治家はこれを知つてゐる。知つて居りながら、總ての點に於いて、外交上の平等を要求してゐるのである。この遅れて居る根本原因は、在來支那が默認して來た外交上の不平等にあると思ひ込んで居るのであつた。一切の不平等を脱却して對等國の待遇を受くことが支那の更生の路だと、南京政府の政治家は信じてゐる。従つて南京政府の對日外交の背後には、此の思想が強く流れてゐて、隙があれば、現状打破の舉に出でる、排日的態度をとる、陰險な策謀に出づるといふ具合で、日支間の外交は荒浪が絶へない。この背後の思想を巧妙に利用して、自己政權の強化を圖つてゐるのが蒋介石である。在來の排日運動で、蒋介石の政權はどれだけ利益したか。上海・滿洲事件で蒋介石の政權はどれだけ強化されたか。過去何ヶ年の間蔣政權を強むる結果となつてゐるのである。

逆説的に聞えるけれどもこれは事實である。蒋介石は如何に大義名分ありと言へども、自己の政權を弱むる如きことは決して爲さない。自己政權の強化の爲めなら、いかなることも爲し得るのである。日本の一部には、排日運動は國民的運動で、一蒋介石の力をもつてしては、どうにもならないものであるかのごとく信じてゐるものもある。僕は、そうは思はない。蒋介石の決心一ツで一日にしてこれを取締り得るだけの睨みと統制力と壓力とを、蒋介石はもつてゐると信じてゐるのである。すべての外交、内治の問題もそうであるを見ていゝ。只だ巧妙にカモフラージュされて、彼のこの我儘が露骨に表面に現はされないだけである。

そこで、日本の對支外交は、理論は別として、實際上の効果を上げるためには、蒋介石に迫つて行かねば駄目だと思ふ。蒋介石のツボを押すことが、對支外交のツボだと思ふのである。

彼は過去何年間、排日を利用して政權を強めた。日本がシビレを切らして、これが應待手段として北支那に於いて實踐的な行動に出た。蔣政權と日本の實行力と正面衝突の危険さへ豫想されたのである。現下の蔣政權にとつては、日本の實力以外に恐いものはない。その實力と衝突することは、自己政權の存立の危険となる。如何やうにしてもこれを避けねばならない。それで彼は一時排日を彈壓して見せたのである。併しこの必要がなくなれば、また何時でも排日を起し得る餘裕をもつてゐるのである。火の子が蒋介石政權の利害得失のところまでかゝつて行かなければ、對支外交は、どうしても實際的效果を擧げ得ないといふことを痛感するのである。蒋介石を倒せといふわけでは毛頭ない。只

だ蒋介石政権のツボを押すやうな外交でなくては、日本が、今、思つてゐるやうな外交は実績を擧げ得ない——日本が外交方針を變へたら別だが——。

——外交時報・昭和一〇・一二・一五——

206

第三章 南京政府の對日外交に見る一つの性格

對支認識プランクの外交理論

蒋介石の對日轉向が熾りに傳へられる。そこへもつて来て廣田がいよいよ對支外交に積極的に乗り出すといふ、何だか日支外交整調の機運が今にも來さうな氣がする。だがそんなに易々と來るものかどうか。

蒋介石を中心とする南京政府は特殊な複雑な性格、傾向をもつて居る。近代國家の雰圍氣の中では想像の出來ない特殊な性格をもつて居るのである。この性格があるために日本の對支外交に意外な喰ひ違ひが生じた。近かい例は幣原外交である。幣原の對支外交は、外交理論においても、その中に含まるゝモラリテイに於いても満點に近いもので、理窟通りに行くならば、幣原が確信して居た通りに、日支關係は完全に整調されねばならなかつたのである。然るに結果は逆であつた。幣原は慘めな目に遭つて退いたのみならず、その後の南京政府の日本に對する態度は加速度的に硬化した。これ

は何故であるかといへば、幣原は大學ノートの外交理論をそのまま實踐に移した、南京政府の特殊な性格、傾向に對する認識がプランクであつたのである。特殊事情を重視せずして原則を重視したためである。これを逆に言へば、若し支那が日本と外交理論を同じくし、モラリテイを同じくする近代國家であつたと假定すれば、幣原外交は決して失敗するものではなかつた、今頃は日本の政界にかく／＼たる幣原時代なるものが現出して居たかも知れない。

蒋介石の今回の轉向に就いても、我等は篤とこの南京政府の特殊性に就いて考慮しなくてはいけないと思ふ。日本人の思想や人情では、これこそ日支親善の途と思ひ込んでやるのが、意外な結果になることがある。

南京近代外交のヒューダル・イデオロギイ

僕が大阪毎日の南京特派員として南京に着いた時は、丁度濟南事件の直後で、親日派と目されてゐた黃郛外交部長の失脚、排日家の王正廷が新に外交部長に就任し、その辣腕を振はうとしてゐた時であつた。日本では幣原が引つこんで、田中が外相を兼攝してゐる時であつた。一方に王正廷あり、片方に田中あり、然も濟南事變の直後であり、定石から言へば、南京は排日、毎日にたぎり立つて居なければならぬ筈であつた。

然るに、不思議にも、南京事變以來毎日の高潮に達し、日本人さへ見れば罵詈譎、惡道の限りを

207

盡して居た南京の排日が濟南事變をキツカケにして鎮靜した。南京事變以來南京に復歸の出来なかつた日本の居留民が濟南事件のために復歸が出来るやうになつたのである。日本人流の理論から考へると、これは逆でなくてはならない。南京事件では日本は全く無抵抗であつた、のみならず、英、米の砲艦の南京砲撃には、邪魔こそして居れ、加勢して居ない。日本の驅逐艦は、下關のハルクに避難集合中の日本の居留民が毆打され、掠奪されてゐるのを四百米の沖合から雙眼鏡で眺めながら黙つて見て居たのである。南京事件で日本の執つた態度は幣原流の打算から割り出せば、南京政府が反省して感謝すべき筈である。然るに事實はこれと逆行して極端なる侮日感情となつた。

田中の出兵による濟南事件は、これとは逆に、これによつて濟南市は巨大な損害を受け、七千近き死傷者を出し、然も蔣介石の北伐は一時挫折したのである。南京政府としては恨骨髄でなくてはならない。然るに事實は、これと逆行して居る。南京にあつた極端なる侮日は鎮靜して日本人は大手を振つて南京の市中を通行が出来るやうになつたのである。僕はこの事實に面喰つた。日本人流に考へては解けない謎である。然しこれを支那人のサイコロヂイで考へれば、仔細はないことであつたのである。卑俗な言葉で表現すれば、「長いものには捲かれる」といふ四千年來の遺傳が、對日外交の近代面に出て來たまでのことである。「強いものには弱く、弱いものには強く」といふ獨特の遺傳が、その後の南京政府の外交面の到る處に出て來るのを僕は興深く眺めたのであつた。日本人のケツベキからすれば、この支那の「強き者には弱く、弱き者には強く」といふ根強き遺傳は、考へることさへ

も嫌な氣がする。小人の根性だからである。日本人は日本人流に南京政府を見たがる、小人の心底をもつて南京政府の裏を見たくないのである。だが、これが日支關係のウマが會はない最大の原因と思ふ。日本人は日本人流の思想から斯くあるべしと筋書を立て、支那に對する、然るに事實はちつともこれに添はない。そこで支那人の不誠意を憤る。この現象を繰返して來たのが過去四十年の日支外交史であるのだ。支那人に日本人流の誠意があると思ふのが始めから錯誤であつて、支那人に便宜以外に日本人の考ふるやうな誠意がある筈はないのである。

「一面抵抗」「一面交渉」の本質

濟南事件によつて外交部長に就任した王正廷の外交は、實に旭日昇天、南京政府の外交史中最も華やかな時代であつたといへやう。英、米、佛、伊何れも王正廷の手玉に取られた時代で、王正廷は當中が外相として居る時は日本に對するいやがらせも内輪であつた、田中に次いで、幣原が再出馬をするに於いて南京政府の對日惡戯はそのアクドさを加へたのであつた。

そのアクドさがつり／＼つて滿洲事件となり上海事件となつた。滿洲事變前後における南京政府の日本認識は寔にブーアであつた。日本は南京政府が如何に江南において露骨な排日を行ひ、日本の權益を侵さうとも上海に出兵するとは絶對にあり得ないと思ふて居た。その理由として、米國の極東

出兵、日本國內の輿論の反對、共產黨の蜂起、日本陸軍の腐敗、日本財政の破綻等夢のやうな條件を擧げて日本を見損なつて居たのであつた。そこで上海事變の起つた一月廿九日までは、南京政府は上海事變を豫想しなかつたのである。従つて南京政府の對日強硬政策は上海事件までが絶頂であつた、即ち弱い者には強く出たのである。然るに上海事變となつて日本は敢然として實力を行使した、日本の陸戦隊と、十九路軍とが上海において衝突した廿九日、僕はまだ南京に居たが、その時の南京の朝野の面喰つた有様が、今でも眼に浮ぶ、蔣介石、汪兆銘は身一つで飛行機にて洛陽に飛び、政府役人や市民は争ふて揚子江を渡つて北方に避難したのであつた。

洛陽に移轉した南京政府の對日外交は「長期抵抗」方針であつた。日本とは永久に交際しないといふ方針である。その肚には、支那が、三年間、對日經濟絶交を續くれば日本は經濟的に破綻する、且又、日本は滿洲出兵費だけでも財政破綻に直面して居るといふのが、洛陽における南京政府の日本認識であつた。

上海事變によつて、日本の武力の壓力はわかつた、然し經濟的、財政的には頗る脆弱なものと見たのである、従つて、上海事件後の南京政府の對日外交は、「弱い者には強く、強いものには弱く」との遺傳を發揮して、日本の弱點と思はれて居た經濟方面に攻撃の手を延ばしたのである。即ち排日運動を更らに組織的にしたのであつた、一面日本の武力的攻撃に對しては極力これを避くる方針を執つたのである。これによつて汪兆銘の所謂「一面抵抗、一面交渉」の外交原則が生れたのである。この

「一面抵抗、一面交渉」とは、日本の武力方面に對しては交渉によつて解決、一面經濟方面に對しては攻撃するといふことであつたのである。

更らに南京政府の對日外交に轉換の必要を感じせしめたのは日本軍の熱河攻撃から北支進出であつた。即ち蔣介石の長期抵抗の決心にヒビが入つたのである。汪兆銘、黄郛、唐有任等の所謂親日派といふものが重要視されたのは此の頃からであつた。これ等は日本の武力的攻撃を緩和するためのスポンジ帯として蔣介石の考案したもので、盛んに親日放送をなして、日本の朝野に働きかけたのである。日本の強い一面に對する對應策であつたのである。斯くして日本の實力による攻撃を緩和しながら、日本の弱點と思はれて居た經濟的方面に對しては執拗にして、且つ合法的な、即ち日本から揚げ足を採られない方法によつて排日を續けてゐたのである。即ち國產獎勵、關稅增高、原產地標記等、その他若し日本が抗議を出せば内政干渉となるやうな魂膽的な排日の方法を執つたのである。

然るに洛陽に於いて國民政府が考へたやうに、三年たつても日本の經濟の破綻は來ぬのみならず、日本の産業機能はその間に急速な進歩をして世界の脅威となつた。

その間、南京政府が執つた總ての對日外交政策は悉く失敗であつた。日本は、武力的にも經濟的にも、支那が考へた程、弱いものではない、御し易きものではないといふことがおぼろげながら判つて來たのである。

南京の對日外交失敗の根源

その間、支那の内情を見ると、種々なる事情によつて蔣介石の武力的政治手腕によつて獨裁政權は樹立されたけれども、蔣介石の政權に反比例して農村の疲弊、經濟の混亂は加速度的に増大して來た。滿洲事變前後より特に著しくなつた輸入超過、華僑の途金減少は支那の國際貸借を著しく悪くし、殊に米國の銀政策は南京政府統治下の經濟界に一大打撃を與へた。この分で行つたら浙江財閥は各部門に於いて破綻を續出する形勢になつて居た。且又外交的には、南京政府が日本牽制の計畫のもとに立てたところの外交政策は一つとして成功してゐない、國際聯盟、歐米依存、ロシアに對する期待等は悉く外れてしまつた。南京政府の生くる途は八方に塞がつてしまつたのである。要するに滿洲事變以來日本を敵視して立てた對内、對外政策は悉く失敗であつた。その原因は、南京政府が日本の國力を錯覺したためである。即ち日本は南京政府が思つて居たよりも遙かに強かつたためである。弱いものには強く、強いものには弱くといふ南京政府の性格によつて、日本が弱いと思ふて強く出たのが悉く失敗だつたといふまでである。

そこで南京政府の日本の再認識といふ現象が起つて來た、南京政府の、特に蔣介石の對日轉向といふのは、斯うした下地に依るものである。

蔣の魂膽と美辭麗句

そこで、日本には蔣介石の對日轉向が眞であるか虚であるかといふ検討が起つて來た。また、南京政府が誠意をもつて日本に求めて來ればいろ／＼な援助をしようといふ議論も湧いてきたのである。

蔣介石の轉向は——若しそれがありとして——虚か、眞かといへば、兩方言へる、日支共存、共榮の大亞細亞主義的見解のもとに、蔣介石が眞に目醒めて日本と提携しようとする轉向して來たと言へば眞赤なウソだ。日本と對立してゐては、蔣自身の地位が保てない、溺れる者は藁をもつかむの理窟から最後に日本に手を伸べて見よう、日本をテストして見ようと言ふなら一部の眞實である。だが、日本で騒ぐやうに、蔣介石を中心とした南京政府は轉向して來て居ないやうに思ふ。日本の再認識に一步踏み出して來たまで、日本に救ひの手をさし伸べて來たと思ふのは、多少早合點過ぎはしまいかと思ふのである。

日本人はお人よしだが決して輕薄な國民ではない、國際間の出來事でも大概の場合惡意に解釋しない。蔣介石が前例を破つて鈴木前駐支武官や吉前公使と會見すれば直ちに蔣介石の轉向だと考へたがるのである。蔣介石がいかなる魂膽をもつて日本側と會見したかといふ、その裏を考へない、これは國民的に美點であり、日本が國際的にノシ上げて行く一種の力ではあるけれども、底意の多い支那にかゝつては甚だたよりないものである。蔣介石が日本側と會見したのは、實は關東軍が恐しかつ

たばつかりであるといつていゝ。さきに行はれた關東軍の大連會議、それに引きつゞく宋哲元の討伐は、蔣介石に大きな不安を與へた、即ち關東軍が再び北支進出の物凄しい計畫をもつてゐるのではないかとの疑心暗鬼を生じたのである。そこで、強い者には弱く出たのである。即ち在來蔣介石が使つて居た汪兆銘、黃郛、では間尺が合はぬ、蔣介石自ら出で、公使、武官、と會見して、對日態度緩和のゼスチュアをなしたのである。その證據にはこの會見で蔣介石が最も力を入れたものは、日本が支那侵略の計畫なきことを證明して呉れといふ一點だけであつたのである。

實のところ言へば、支那内部の財政、經濟の不安、對日外交の失敗、等々の下地はあつたらう、けれども、蔣介石の腰を上げたる最大の要因は上記の關東軍の強さ以外にはないと僕は思つて居る。廣田前外相の議會における協和外交のゼスチュアでもなければ、有吉前公使の靜觀主義でもない、蔣介石はたゞ、直接に強い者が恐しかつただけである。

南京の對日外交の目標

上記のやうに南京政府の外交には獨特の一つの傾向がある。そこで僕等は考へる。南京政府の政治家に會つて、彼等が一樣に言ふことは日本の對支外交の「二重性」は寔にこまるといふことである。即ち日本には軍部の對支外交と、外務省の對支外交とがある。何れが日本の對支政策か判らないで困るといふのである。ところがさう言ふ南京政府の對日外交は、實に四重にも五重にもなつて居るので

ある、立法院、黨部、外交部等はそれ／＼独自の對日外交政策をもつてゐるではないか、これだけ見ても、日支外交の關係が平面的に見られない證據である。日本の二重外交を批難する南京政府の政治家の眞意は、日支の外交面から日本の軍部を排除したいのである。空手と空手なら南京政府の外交家の方が、日本の外交家よりもすつと勝目がある。現在の南京政府の外交は、實際、一外務大臣を相手にして考へられて居るものではない、明かに對照は日本の軍部、殊に關東軍の實力に對する考慮が南京政府の外交を動かして居るものと考へてゐる。茲において考へ合せなければならぬのは、南京政府のゼスチュアに對して日本はどうすべきかといふことである。一部には早くも蔣介石援助論、對支經濟援助論、對支經濟調查團組織等、いろいろな計畫が論議され、善意の押し賣りをしようとしてゐる。南京政府の政治家が日本の甘さに赤い舌を出して居る有様が、まざ／＼と僕には見える。相手が獨特の性格をもつた南京政府である。それを對照として、やられる日本のこの助平根性が、どれだけ彼等に利用せらるゝかといふことを考慮しなくてはいけないと思ふ。

今若し日本が、こゝに日本人流の誠意をもつて南京政府を援助する、南京政府は、これを都合のよい道具としか考へない、道具が道具の使命を果せば未練なく捨てられる、その時に日本は支那の不誠意を憤るのである、然して日支の關係は悪化する、——試みに思へ、日支四十年來の外交史においてこの経路は幾度び繰り返へされたか。四十年來の外交史はこの経過の連続である。

第四章 對支政策の要諦

南京の日ソ危機説流布と實際

南京政府並に其の統治下の人民は日蘇戦争を大變期待して居るやうである。日蘇戦争があつてくれれば宜いなど云ふ感情が非常に瀾漫して居る。南方の新聞雜誌等は一寸したアクションが國境に起つてさへも、非常にセンセーショナルな活字で大きく取扱ひ、今にも日蘇開戦かの如く書立てゝ居る。此の空氣に私共も多少酔はされ蘇滿國境方面にあつては我は随分緊張して居るのではないかと感じさせられたものだつたので、かつて、私が昭和九年に支那から東京に歸つた時、その機會に國境に行つて見たいと思ひ、大黒河に行つてみたことがある。然るに、その當時は、豫期に反し大黒河方面は實に明朗平和であつた。全く南方に於て豫想して居つたやうな空氣はなく、實に平和そのものと見えた。對岸のブラゴヴェシチェンスクには騎兵の集團が見へたり、トーチカが並んで居つたり、盛んに飛行機が飛んで居るので、可成り物々しい状態と見受られたが、これに對する滿洲國側の大黒河には僅かの歩兵の小集團と國境守備隊があるばかりで、これといふ防禦の設備もない。こんな風だと全く露西亞側から攻められれば鎧袖一觸だと吾々素人にも見へた。其處に居る軍事専門家に聞いて見ても攻め

て來られれば大變なことになる云つて居た。大黒河に駐屯して居る軍隊の根據地は後方の……であるが、其處には比較的多數の軍隊が居ると云ふが、大黒河と聯絡するのに自動車で二日を要する程で全く孤立地帯である。然も軍備は上述の如く全くない状態であつた。

滿洲里及びボクラニチナヤ方面に於ては大黒河方面よりも幾らか設備が出来てゐたらしいが、大體に於て國境方面に於ては露西亞が十の力を持つて居るとすれば、日本は一の力しか持つて居ないのではないかと迄軍事専門家に於ても觀察して居た。

右の様な状態で若し露西亞が本當に滿洲に侵入しようとしたならば譯のないことであつた。即ち、國境方面は非常に危険な立場に陥るのではないかと感ぜられた、と同時に、露西亞が踏み込んで來なければ戦争はあるまいとの印象を受けて歸つて來た次第である。大黒河視察の目的が戦争の勃發に對する真相を知りたいと云ふ譯であつたが、以上の如き結論を得て歸つた次第である。

所謂南京藏本事件の眞因

次に南京藏本事件を中心にして南京政府の一つのインクリネーションとキャラクターに就いて述べてみよう。

此の藏本君は私も友人の一人であつて能く承知して居るが、實は僚友の間では可なり先生の無能を輕蔑されて居つたものである。北平の或る洋服屋の小僧をして居た時、非常に支那語が上手だと云ふ

ので拾ひ上げられた人ださうで、段々やつて居る内に書記生の古参として南京に來た譯である。所が南京には妙な制度があつて大きな外交々渉は總領事が取扱つて居るが、一寸したローカルな事件は、大抵書記生の頭が支那側に交渉に行つて居る。所が一方支那と云ふ國は面子を重んずるだけに肩書を尊重する所なので、書記生であつては實に當りが悪い所から、書記生ではあるが副領事と云ふ名前を應用して居つた。今迄、いつ迄経つても副領事になれず歸國ギワになつて副領事になつたと云ふ例は二三南京にもあつた譯で、先生も副領事として支那側に對して居つたが、それが或る時現實に暴露したのである。即ち南京政府の外交部の落成式があり、其の際各國の副領事以上の人が招待された、所が藏本君一人だけがオミットされて居る。是は取も直さず、お前は本當の副領事ではないのださうなと云ふことが言外に現されて居る譯なので、先生中々不快である。悶々として居る間に夜になつた。此の日は吉さんは例の外交部の宴會に行つて居つたのであるが、電話で自分の荷物を停車場まで送つて置いてくれと云ふ命令を出した。すると藏本君は自分をボーター扱ひにすると云ふやうな憤慨が腹の底に燃えたのであらう——私はさう想像して居るが——愈々荷物を停車場に持つて行かうとした。所が乗る自動車は満員で、而も一番左に乗つて居つた何某君は非常にぶつきら棒の態度で傲慢の男である。人間は非常に好いのであるが、例の調子で、「あゝ君は行かぬで宜いよ」とあつさりやつたのださうである。私は目に見るやうに此の時の光景を思ひ出す。二つも三つも前から重つて居つた藏本君の鬱憤は、ぐつと來て其儘彼は領事館の坂を下り紫金山に入り込んでしまつた。若し自動車の左に

居つた人が何某君でなく、もう少し辭令に慣れた人であつたならば、藏本事件の如きは起らなかつたと思はれるのである。

支那の排日運動の合法的惡質性

歴史は必然的過程によつて進められて行くとマルクスは言つてゐるが人の顔色一つ、笑靨の出來具合、鼻の高さ低さなどでも歴史は非常な急廻轉をすることがある、この藏本事件も其の一例だらうと思ふ。藏本が居なくなつたと云ふので私共の頭に先づピンと來たのは南京の憲兵隊がやつたたと云ふことである。須磨總領事も警察も居留民も吾々新聞記者も全部さう思つた。南京で自殺など誰にも想像出來なかつたのである。一體南京の排日は露骨で、陰險で、實に惡性であつた。當時、南京の方から日本に排日情況は傳つて居なかつたから餘程下火になつて居ただらうと想像したかも知れぬが、南京の排日は今でも尙ほ非常に惡辣であつて、日本人を目するに敵人意識を以てして居た。上海事件を限りとして南京政府の排日と云ふものは全く色彩を異にしてゐた。上海事件前の排日はデモンストレーションをやるとか行人に暴行を加へるとか、日本商店に投石するとか、新聞雜誌に非常に失禮な言辭を弄するとかで、日本側から掴まうとすれば尻尾を掴み得るやり方で、外務省で抗議の出來るやうなやり方であつたが、上海事件後のやり方は非常に内面的になり、合法的排日即ち日本品を目的として關稅の引上げを行つた如きは其の一例である。原產地標記條例即ちメイド・インジャパンと云ふマ

クがなければ税關を通さぬと云ふやうな條例などを作らうとしたのも、明かに合法的排日の一例であつた。斯の如くして南京に於ける排日は内面的に進められ日本商店の如きは殆んど全滅した儘未だ一軒も回復して居ないと云ふ状態であつた。それは若し支那人が此の日本商店に出入した事實が分れば南京の衛戍司令部は直ちに其の支那人を拘禁してしまふ、大毎支局の周圍にさへ常に四五人の監視が付いて居る有様であつたから、誰が來たかは明瞭に分る。内部のボーイ、女などもちやんと向ふとの聯絡があるらしく、私共が晝食に取る食物が何であつたかと云ふことさへも夜になれば衛戍司令部に知れて居たさうである。吾々が街上で寫眞を擲つても没収されると云ふやうに實に悪性となつて居た。斯様に内部的な排日であつたので此方から抗議を出せない有様であつた。

如上の状態であつたので藏本事件の起る前にこんな事件もあつた、日本電報通信社が同地で通信を發行するので、その翻譯のため上海から日本語の出來る支那人を雇つた。所がさあ出さうと云ふ時になつたら例の支那人が行方不明になつてしまつた。電通は非常に狼狽し、總領事に言つた所で仕方がないので陸軍武官の方に頼んで衛戍司令部に交渉して貰つた。するとそんなことは決してありませぬとはつきりした返事である。一週間ばかりすると其の支那人は眞青な顔をして蹠踉として現れた。どうして出たんだと云ふと、四五人の人が私の歸りを邀して或る所へ連れて行き、非常な虐待をした、之は衛戍司令部の便衣隊か私服の探偵であつたやうに思はれる、と報告して其の支那人は直ぐ上海に引上げてしまつたやうな事件もあつた。

此の事件の直後一週間も經ぬに藏本事件が起つたので、私共はそれだと思つてしまつた譯である。全く憲兵の仕業か、憲兵隊の内部にある藍衣社の仕業か何れかに違ひない、之を押せば分りはしないかと思つて憲兵隊だと斷定して報道したりした。外務省の須磨總領事等もさう云ふ斷定の下に最初は此の交渉を進めようとしたのであつた。恰も好し陸軍の楠本中佐がやつて來て、南京に斯の如き事件の起るのは專管居留地を有たぬからである、一つ專管居留地を要求してやれ、領事館のある地帯に特別地帯を設けるやうに強要しろと云ふ二案を言ひ出して來たのである。此案が後に至つて非常なる好結果を産んだのであるが、斯うして一同がわあ／＼やつて居る時にひよつこり藏本英明氏が出て來て來たとなつたのであるが、私は十四五年間新聞記者をやつて居るが此の位馬鹿氣た事件に突當つたことはない。私は今度歸つてから新聞記者を三四十年もして居る私の社の奥村氏に此の話をして、あなたも斯う云ふ馬鹿氣た事件に突當られたことがありますかと質問すると、暫く考へられて三四十年一寸ないと云ふて笑はれたが、私は斯う云ふ非常に馬鹿氣た經驗をして來たのである。

南京の打算外交

話は暫く前に戻り、吾々が支那側の憲兵隊と、がや／＼やつて居た時、ぼつくり藏本氏が出て來たので、それ見たことかと云ふて支那側がぐつと強く來はしないかと懸念した。是まで可なり日支外交は常道化しつゝあつたが是で終りだ、と或る要路の外交官は云つたが、私共も多少さう云ふ氣がした。

所が是は全く逆であつた。其の後の支那官憲の吾々に對する態度や總領事等に對する態度は非常に鄭重になつて來た。隨つて汪兆銘、黃郛等の地位も可なり前より強固になつて來たやうに見へて來た。何故か今まで支那が一寸間違ふと直ぐぐつと自分の襟でも絞められさうな所は北支那だけであつた。支那に於て北支那だけはどうかすると日本から兵を向けられるが、南方へは餘程のことではなければ兵は進めまいと安心して居つた。南京政府はさう考へて居つたが、藏本事件で專管居留地を要求しやうと云ふことが直ぐ向ふに分つたので、此の際南京政府が日本に強硬な態度で押進んだりしたならば、うつかりすると日本の軍部は中村事件の如きものを殊更らに造つて南京政府の膝下に手を下だすかも知れないといふ恐怖と猜疑が蔣介石初め南京政府要人の頭にばつと來ただらうと思ふ。その證據は後になつて聞いたが南京遷都説である。遷都の準備をやつてゐたと云ふことで、杭州にあつた一個旅團ばかりが、南京杭州間の宣興迄來て居つた程で、南京政府は餘程狼狽して居つた。うつかりして居ると日本が本當に來るのでないかと云ふ懸念をしたので、今の内に日本との外交を整調にしなければならぬと云ふことに蔣介石の頭が傾きかけてゐたのは事實である。斯様に吾々の考へと逆の場合が既に二三回あつた。その第一の時は熱河攻撃の時であつた。有吉前公使は日本軍が更に熱河を攻撃するならば彼等の面に痰を吐くやうなものである、如何に支那が馬鹿であると雖も國を焦土にしてもやらなければならぬと云ふ自暴自棄的氣分となつて、全面的の戦争になる、夫故に是以上はしないが宜いと云つて居られたやうに思ふ。私は其の時も「いや、逆な結果になりはしないか、日本人ならば國を焦

土にしても恥を受くるよりましだ、一つやれと云ふ感情を有つけれども、支那人は國を焦土に歸するから、今の内に何とか手を出して大きくならぬやう相談しなければならぬと云ふ打算が先に來る。是は日本人とは全く對蹠的な國民性の相違であると思ふ」と云つたことがあつたが果してさうであつた。もう一例は上海の閩北の例である。上海事件で徹底的にいため付けられた閩北は、恰も日本の東京震災の燒跡のやうな状態になつたものである。日本から來た人々を私は其處に案内したのであるが、皆均しく云はれるのには、斯う云ふ慘害を日本人から受けた以上は此の慘狀が残つて居る間恐らく支那人の日本に對する怨は消へまい、排日は是がある間は止まぬだらうと質問されたが、是も亦逆であつた。私は其の時いつも斯う云ふ殘骸がある間は此の附近に排日はないと答へて居つた。事實現在に於ても閩北一帯が支那に於て最も排日のない所である。閩北の地から遠くなればなる程排日がひどくなり、雲南等の邊疆の排日運動は非常に悪性であり、露骨である。日本軍の直接脅威は受けなかつた南京は僅かに上海より二百哩しか離れて居ない所であるが、此處も亦遙かに上海よりひどい露骨な排日が行はれて居たのである。そんな譯で藏本事件の結果うつかりすると日本は南方にも殊更ら中村事件の如きものを起して兵を進めやしないか、といふ恐怖を南京政府に與へた。従つて早く今の内に何とかしなければならぬと云ふ感情が湧いたと見るべきで、蔣介石の對日態度は一方は排日に決つて居るが他方亦可なりに日本と外交關係を整調にしなければならぬと云ふ方に傾いて來最近では親日的傾きが一二分多い。併し是はバイプレイションで常に動いて居るが僅かでも親日に傾いたと云ふのは藏本事件

の効果であるやうに思ふ。

對支外交に關する私見

此處で對南方政策を考へて戴きたい。蔣介石乃至南京政府の要人の對日態度に可なりの動搖が來てゐるといふ事實を本當として對南京外交を考へると、今程大事な時はないやうに思ふ。確かに目下の南京政府は日本との外交關係の整調をしやうと思つてゐる。せなければ危険であると思つて居り、せざるを得ないやうになつてゐる。そこでこゝに日本は一つの方法を用ゐる用があり放つて置いてはいけないと思ふ。その方法は私も十分考へて來た。これは日本の軍部でやり得るか、やり得ぬか知らぬが、卒直に申せば……中將を支那の武官に持つて行つたらどうかと云ふ案である。……中將は支那側にあつては實に氣味の悪い男にされて非常に人氣が悪い。此中將を支那側武官に据ゑると第一に蔣介石の頭にピンと行くだらうと思ふ。即ち日本軍が何か本當にやらうと云ふ氣があるのではないか、やられては大變だと云ふので蔣介石は……將軍にアトラクションを感じるだらうと思ふ。是は蔣介石の非常なる動搖である。此の動搖即ち……中將の壓力を土臺にして外交々涉をやつたらと思ふのである。若し……中將がいけないとすれば、……か……でも宜い。併し後の二案は別の意味に於てである。此の二人は支那に於ては非常なる陰謀家とされてしまつて居る。それ故に南京政府ではうつかりすると日本は南京政府統治下に於て何か大きな謀陰をやりはせぬかと云ふ威壓を蔣介石に與へ

る日本人ならば警戒しなければならぬと云ふて心を緊める。藏本事件にしる、熱河事件にしる、閩北の事跡にしるいゝ例だが、支那人は威力あるもの、強力なるものに對しては日本人とは別の感情を以て迎へる國民であるから、……にしる……にしる蔣介石の上には相當な壓力となるだらうと思ふ。蔣は目下のところ謂はゞ動かぬ巖である。巖の下に挺を置き、之を利用して外交官が外交々涉を進めて行く以外南京政府を動かす方法はないと思ふ。

日本に歸つて第一に聞かれることは蔣介石は親日か排日かと云ふことであつた。彼は親日でもなければ排日でもないと思ふ。蓋し排日であり、日本との關係を多少でも好くしようとする所の親日に、彼の立場の保存がある。然らば、蔣介石の所謂統治力がどうなつて行くか又現在はどうかと云ふ點に付て簡単に申上げて見たいと思ふ。

蔣介石對策について日本に二つの對蹠的な意見がある。一つは蔣介石を統治的な一つの大きな力として置くことは、いざ鎌倉と云ふ時に日本に不利であるからどうしても之を倒さなければならぬと云ふ考へ方であり、他は蔣介石を据へて置いて日本に攻めて來ぬやうにこれを味方にとりこむ、即ち彼を親日にすると思ふ考へ方である。

第一については蔣介石を倒すことが出来るか出来ぬかと先決問題であるが、之に就いて私は殆んど一年半ばかり研究して見た。現在蔣介石に此處を突けば倒れると云ふ念所があるだらうかと云ふに彼にはそれがない。財政的にも軍事的にも將又政治的にもさう云ふ急所を見出すことは出来ない。財政

のことは別として反蔣軍閥、共產軍等蔣介石に對立する勢力はあるが、これを援助して蔣介石を倒せるかといふことは疑問である。共產軍討伐は仲々むづかしいものと日本では考へられて居るが、私は以前から蔣介石の共產軍討伐は一つのトリックだと思つて居る。即ち共產軍があれば危い／＼と云ふ脅威を浙江財閥に與へて置いては自分が討伐する。そして十字軍的な英雄に祭上げられながら軍費を浙江財閥から搾上げ、これをもつて蔣は自己の軍隊を段々と立派にする。彼の有する十二個師團の直屬軍中八個師團の直屬軍は兵器その他の裝備の點に於て實に優秀なものであつて、他の傍系の軍隊に對して殆んど競争を許さぬ程度である。之を土臺にして蔣介石の統治力は立つて居り、又一方面のことには浙江財閥の資本力も段々大きくなつて来る。私が南京に行つた六七年前の浙江財閥の資産と今日の彼等の資産とを較べて見ると約三倍位に激増して居る。此の大きな資本力と精銳なる軍隊をバックにして彼は現に非常なる獨裁政治を行つて居る。而して此の獨裁力は恐らくムツソリーニ等よりも鋭角的ではないかと思ふ。日本では汪兆銘或は孫科等國民黨の先輩の勢力を過信して彼と相對立して居るかのやうに考へてゐるが、實際南京に行つて見ると汪兆銘、孫科等は寧ろいつでも首の座に晒されんとして居ると云ふやうな殆んど問題にならぬ勢力關係である。即ち蔣介石の獨裁力は更に想像以上に強いのであつて、彼の一撃一笑に戴天仇ノ如き手合は胸を踊らせて居る有様である。随つて蔣介石を倒すと云ふことは日本が全面的に戦争をする覺悟で軍隊を持つて行くならば別であるが、反蔣軍閥を援けるとか、共產軍の勢力を頼みにしてゐる位では倒れるものでないと思はれる。

結局日本……………豫想しての對支政策は此の蔣介石の勢力を一つの勢力としてこれに重しを加へることが大切ではないか。重しを加へることは倒すことではなく、何かの壓力を加へて置くと云ふこと、是が必要と思ふ。それには前述せる如く軍部が睨みつける形式を探らねばならぬこと、即ち……………等の將軍が乗り出すことが最も有効であらう。西南邊疆に反蔣聯盟あるを以て之に相當力を入るゝも宜いが、蔣介石を倒す事は結局困難ではないかと思ふ。要するに蔣介石を牽制する意味で西南の反蔣聯盟を援助することも一手段であらう。或は北支に於ける政權も成るべく蔣介石と切離して、彼を牽制すると云ふことに仕向ける必要もあらうが、反蔣勢力を糾合して彼を倒すことは今の所絶望ではないかと思はれる。

——支那・昭和九・十一——

第五章 廣田の對支外交

廣田外交と幣原外交の相違

僕は廣田外交と幣原外交の相違を考へて居る。世人は、廣田外交と幣原外交のちがひは、廣田と幣原の顔つきの異なるだけで、首から下は同じだといつてゐる。廣田の顔は頗る重厚で、勿體ぶつて何かイワクのありそうな面構へをして居る。幣原の顔はいけ好かない獨りよがり、片意地だと思はせ

る顔だ。そこで廣田のしぐさはたとへ幣原と同様のことをしても、異つたアトモスフィアを生ずる。これが幣原と廣田外交の相違だといふのである。

僕は外務大臣のパーソナリティによつて、一國の外交方針が決定的に左右されるものとは毛頭思はない。従つて嚴密に言へば、廣田外交とか幣原外交といふ名詞はジャーナリズム的通念の表現でしかあり得ないのだ。で、この名詞は單に廣田が持ち、幣原が放つアトモスフィアによつて與へられるものであらうと思ふ。

廣田及び幣原外交と軍部

幣原の妥協外交の破綻によつて、内田の焦土外交が生れ、内田の焦土外交が危くなつて、結局廣田の協和外交に轉換した。ヴォキアブライの上から言つても、妥協と協和と、どう異なるか、字の持つ感じから言へば、妥協は立場の弱いものから、強よい者に差し延べられる手であり。協和は對等の立場における握手を感じさせられる。

廣田外交を單獨に切り離して見れば、幣原外交と異なるところは、その背景である。幣原は軍部と對抗して慘敗した。幣原は或る程度まで自己流の信念（寧ろ我見？）を實踐に移した。その結果が大味増であつたことは周知の通りである。廣田の置かれた場合はこの時分と全く趣を異にする。外務省の存在さへ疑はれて居る時勢であり、背後の軍部の主張を無視して單獨の外交の出来ない場合が多い

時代である。或る場合には、廣田は文樂の人形でさへある場合がある。従つて廣田外交といふものは複數である場合が多いが、此處で我等がとりたてゝ言ふ廣田外交とは、廣田が背後に牽制されずに、單獨にやれる外交を拾ひ上げて言ふのである。實は、廣田外交といふものはあり得ないのかも知れない。だが廣田が外務大臣で、外交をしてゐるといふことは事實である。

廣田と幣原に對した南京の態度

對支外交に關する限り、廣田外交と、幣原外交とは、質において同然かのやうに見える。——その前に一體對支外交に廣田は何をやつたかと聞きなほらるれば、僕も確然と學示することは出来ない。けれども多少は廣田單獨の外交もやつて居るのである。——

支那から見ると、幣原の本質は御し易い坊ツちやんに見えた。側から見ても、大學生が海千山千の老妓に英語でも説きながら口説いてゐるやうに見えた。これは馬鹿にされるばかりである。ところが廣田には背後にドスをもつた男がついてゐる。廣田自身は幣原と同然でも、背後の男が恐い。南京政府が、巧みに擬態をとつて、廣田を御し易いと思ひながらも、露骨な表現をなし得ないのは、背後のドスの光りがあるからだ。もしこのドスの光りが消えたなら、廣田の外交は直ちに轉落、幣原の二の舞ひは間違ひない。

南京が廣田を信頼した真相

一體南京政府は廣田個人をどう見て居たか、といへば、廣田の顔付きを買つて居る。支那に理解のある、物わりのよい男として居る。従つて、田中や、幣原や、芳澤に比較して、ずつと評判がよい。日本の内閣交迭に當つて南京政府が一番氣にするのは陸軍大臣と外務大臣だが、齋藤内閣成立當初、前者に荒木がなり、後者には（餘程経つてからだが）廣田の名が出て來た。この配合を南京政府は油斷のならないものと見た。荒木に對してはあらゆる酷評を加へた支那の新聞も、廣田には可なり好意のある批評を加へてゐた。これは何故かといへば、廣田のドツシリとした顔付きが、荒木の緩衝地帯とでもなるかのごとき印象を與へたためである。事實當時、上海に居た須磨あたりが南京政府に向つて「若し南京政府が廣田が外相になつても、日支關係の轉換を圖らなければ、南京政府は永遠にその機會を失ふぞ、廣田こそ最も理解があり、肚もあり、信頼も出来る男である」といふことを盛んに放送し、汪兆銘や唐有任も左様信じ、南京政府の大部分がさういふ風に傾いてゐた。汪兆銘あたりが日支外交整調に一步を進めたのも、その頃からのことであつた。南京政府が廣田に氣を惹かれたのは、全く隣に座つてゐる荒木の顔が凄かつたからである。支那人は本能的に強いものは尊敬する、やさしい者は馬鹿にする。

廣田外交の人氣とその裏面

廣田の評判がよかつたといふことは、日本流に正面から見れば、いふことであるけれども、これを支那流に考へれば警戒を要することであつた。即ち支那人は個人としても集團としても、相手御し易ければ肚の底では別な考へを持ちながら、表面には評價を高くする。重光にしる、有吉にしる、この意味では支那人間の評判がよかつた、廣田の評判のよかつたのもこの意味にほかならない。南京政府では、廣田を支那に理解をもつ、物わりのよい人としてゐた。支那人は、相手が理解をもつと見れば勝手に強くなる。相手が物わかりがよいと見れば、次ぎ／＼に要求を出す。支那にデモクラテツクな政權が一日として存在し得ない理由は、この支那人の本能的傾向によるのだ。相手が理解がなく、物判りが悪いとなれば、支那人はすくんでしまふ、極度まで弱くなる。支那の政治家がタイラントにならなければ統治の出來ないのはこれが爲めである。

従つて今の南京政府の對日外交は、自然二重性をもたざるを得なくなつて居る。廣田に對しては強く、廣田の背後の力に對しては弱く、そして割り出されたのが「一面抵抗、一面交渉」といふ、凡そ近代國際關係理念を超越した言葉である。

現實に南京政府の外交は二重性をもつて居る。一面において、南京政府は確に對日外交整調のゼスチュアを示して居る、と他面において、日本を困らせるあらゆる算段をやつて居る。顔に笑を見せて

心の底に敵意をもつて居るのである。そしてそれが支那人の手品のやうに巧妙にやられて居る。従つて南京政府の樂屋裏を知らないものには、どんな風に使ひわけされて居るものかといふことさへ判らないのである。

對日誠意の押賣りと高買ひ

日本の外務省と南京政府と接觸して居る部面は、地方は別として、中樞では一時、汪兆銘や唐有任等で外交當局を埋めた。この外交當局といふものが本來、對日外交整調を看板にして、日本の壓力を阻止する中間スポンヂ帯として仕組まれてゐたから、従つて、汪兆銘、唐有任の一派は、務めて日本の外交當局に對して誠意を賣物にした、その賣物を廣田が高買ひするかどうかといふことが、結局廣田の對支外交の成敗を決定するものと僕は見てゐた。南京政府が對日外交整調誠意の表現として、廣田に示したものは、日支無電協定、關稅の改訂、南京、濟南事件賠償金の完済、その他二三の懸案解決である。外務省及び出先の官憲の一部には、これをもつて、鬼の首でも取つたやうに、南京政府が親日に傾きかけて居たやうに早やのみ込みして居る手合が居た。實に心もとない。具さに懸案解決の跡を見ると、多くは支那側に利益してゐる。さもなくば損のいかに問題か、または當然支那側が行はねばならぬ義務の遂行に過ぎない。それを宛も親日的表示のごとく考へたことは、大局から見てどれだけ日支の國交を害したことが、排日的感情が満ちて居た支那に於いて、また、政敵の

多い汪兆銘や唐有任が、これだけの懸案解決に乗り出ただけでも、彼等の個人的政治立場は可なり危険に曝された。あからさまに國內に知れば彼等は失脚せなければならなかつたかも知れない。その危険を冒して彼等が表示する所謂誠意なるものが、正直な日本人にとつては悦ばしいのであつた。出先官憲及び外務省の一部の日本人らしいセンチメンタリズムを刺戟したのである。汪兆銘、唐有任あたりの苦心談が、身につまされて悦しい、英雄の冒險談を聞くやうに思はれたのである。彼等は言つた、「これだけ我等は危険を冒して居る。日本は我等が國內的に面目が立つやうにして呉れ。」とこれがいかにも道理があるやうに聞えたのである。そこで、日本の出先官憲や、外務省の一部におこつたのが、南京政府の面目を重んずる意味に於いて——實際には汪兆銘、唐有任等の政治的立場を補強する作用でしかなかつたが——日支大使交換の實現促進運動であつた。

改善さるべき南京の一面

僕は思ふ。汪兆銘や唐有任が、所謂親日的工作をやつたなら彼等の地位を危険に陥れただらう、といふ支那の状態そのものが、先づもつて考慮さるべきものでなければならぬと思ふ。これは端的に言へば、南京政府の反面が如何に排日的であるかといふことを明瞭に示してゐる事實であるからである。親日的工作をやれば、地位が危くなるといふ南京政府の客觀的狀勢が、先づもつて改善さるべきものでなくてはならないと思ふ。日本の對南京外交が、この根本問題に觸れずして徒らに、末梢的工作

にのみ集中される時は、再び滿洲、上海事件のごとき東洋の爲め悲しむべき事件の發生を私は確信する。而して現に、廣田外交は完全に、この根本問題に突き進むことを恐れ、たゞ表面の綱絳をもつて足れりとしてゐた感があつた。従つて、南京政府が當然支拂はねばならなかつたところの南京事件の賠償を完済し、又は中日實業、東亞興業の債務整理の方法を立てると、宛も南京政府が日本に對し積極的に誠意を示したかのごとく喜び、且つこれを誇るのであつた。若し、ほんとうに斯ふ信じて居たならば、寔に、たよりない。

有吉の密會外交

出先にゐた有吉の外交を——外交があつたかどうか僕は知らない。餘りなかつたやうに思ふが——世人は密會外交といつて居る。譬へ方が餘り卑俗であるので、僕はこの言葉を聞くのが嫌ひであるが、そう言はれると密會外交といふ文字は寔に有吉外交に適切なやうな氣がする。その意味は、有吉外交は極端なるコツソリ外交であつたからである。交渉してゐるといふことが外に漏れるといふことを極端におそれる。外から見ると何んであんなに恐がらねばならぬか滑稽に見える位だつた。有吉はこれに對して、斯ふ辯じて居た。「目下の支那の客觀的狀態では、若し日本と南京政府が交渉してゐるといふことが明らかになれば、南京政府の内部に反對があつたり、輿論の反對があつて交渉は出來損ふのだ。且で又、交渉の衝に當つてゐる南京政府の外交官の地位、身邊が危険になる」といふの

である。これは成る程有吉流の立場から言へば一應もつともな辯である。交渉を成立させ、條約を結ぶといふ目的から云へば、支那の客觀的狀態では、この方法よりほかないやうに思ふ。だが目下の日本の對支外交は、一つの小交渉を成立させたり、ケチ臭い條約を結ぶといふことのために×男のやうなことまでなさねばならぬかといふことを考へるのである。日清戦争後の日本の對支外交を見ると、斯うした外交官と外交官との狎れ合ひで生れた條約の連鎖である。支那の全體から言へば認知されない兒であつたやうなわけである。その破綻が滿洲事變ともなり、上海事件ともなつたと私は思ふてゐる。で、斯うした外交は當然清算されて、日本は目前の小問題に拘泥することなく、堂々たる外交陣を張らねばならぬ時期になつてゐるやうに思ふのである。一ツの懸案解決に躍起になつて、外交官と外交官の狎れ合ひまでして、交渉成立を圖る必要は毛頭ないと思ふのである。汪兆銘や唐有任が日本と交渉して居たといふことに危険を感じたといふ事態そのものがすでに、支那側に誠意なき證據だと僕は思ふのである。これに對して、我等は外務省の正確な認識を望むのである。

支那の輿論と支那を欺す者

一體南京政府は、いざとなると早速輿論の反對といふことを口實にとり、日本でも支那民衆の輿論の反對といふことを氣にして居る。これは一體、支那に輿論があるかどうかといふことを考へて見ねばならぬと思ふ。嘗つてウッドヘッドとブランドだつたかP・T・TIMESの上で、支那に輿論

ありや、といふことを討論したことがあつたが、その結果は、今日の政治状態では輿論は支那にあり得ないといふことに決着したやうに覺へて居る。南京政府の統治下においては言論の自由がない。門を構へた新聞社は殆んど全部政府關係のまかないを受けて居り、藍衣社乃至憲兵隊の監視を受けて居る。斯くのごとき状態で自由な言論があり輿論が起り得るであらうか。目下南京政府が稱する輿論の正體は、全部自分等が勝手に作り得る官製輿論と稱するもので、純正なる輿論では萬々ないのである。僕は思ふ、今若し南京政府の治下に言論の自由があり、純正なる輿論が起り得るとすれば、それは目下南京政府の手合ひが輿論と稱するものと、殆んど對蹠的な傾向を示すものであらうと思ふ。即ち彼等が稱する輿論とは、南京政府の治下に可なり細密に張られた國民黨乃至政府の指導者によつて嚴重指導監督されたる言論機關によつて鳴らし出される官製の號令のほかならぬのである。従つて南京政府が親日的であるために、輿論が反對すると稱する場合には、尙ほ彼等の心裏に排日を企圖し、排日に未練をもつて居る時と斷定して決して間違はない。これを純正な輿論のごとく考へる日本人の人のよさを、支那人は嘸肚の中で笑つてゐるであらう。また假りに支那に輿論ありとしても、今日の蔣介石の獨裁力をもつてしては、南京政府は、自由に輿論の歸趨を決定し得る機能をもつて居るのである。従つて僕は南京政府が輿論を恐るゝがごとき姿態を示して、全面的對日外交の轉換を溢り、また輿論を恐れてコツソリ交渉する誠意を示すが如き兒戯に類するたくらみをなしつゝあるのを相手に、吳服屋の番頭のやうな取引的態度で應ずる必要はないと思ふのだ。

滿洲・上海兩事變を解決する外交

今の南京政府の對日外交は、お妾が擅那にかくれて品物を買ふやうな風がある。いやしくも大商人はこれを相手にしない。然るにそれを相手に此方もコツソリ賣り込まふとしてゐたのが有吉外交の外貌のやうに見えた。斯うした態度は、必らずしも外務省ばかりではない。北支問題における軍部方面の態度にもあつた。僕は滿洲事變や、上海事件は何のために起されたかと反問したい氣になつた。滿洲事變や、上海事件は、日本が本當に化粧まわしを締めて、四股を踏んで、土俵に上つて大手をひろげたのである。世界を相手に、日本が裸になつて見せたのである。博勞が袖の下に手をつきこんで牛馬の値段を定め合ふやうな外交は、これを機會に清算された筈と思ふて居た。

交渉の局に當る出先官憲は、どうしても自分のやつて居る仕事を成功さしたいと思ふ。これは人情であらう。そこで成功させるために往々にして大局的結果を忘れることがある。目下の對支外交の最重要點は個々の懸案解決や、ケチ臭い債權の取立てや、チツぽけな條約の締結に非らずして、南京政府に爛漫してゐるところの排日思想に對し根本的なメスを入れることにあると思ふ。

南京政府が外交面において、懸案解決に多少の積極味を見せたり、債務の支拂ひに應ずる氣配を示せば、直ちに南京政府が親日的傾向に轉化せるが如く誤認するのは實に大局を誤る。有吉に言はせると、「折角南京政府が、外交面に於いてだけでも——それがよし偽瞞であつても——親日的傾向を示

すならば、欺されたと思ふて向ふの手に乗り、ウソから眞實を引き出す方法をとればよいではないか」といふのである。ウソから眞實を引き出すといふことは、相手に多少の眞實がなくてはならぬ。支那人に個人としても、集團としても眞實があると思ふところに有吉の幼稚な支那観がある。また欺されて勝つといふことは、此方に餘程の才覚がなくては出来ないことで、相手を十二分に欺し得る者の言ふことである。試みに思ふ、今の外務省に支那人を十二分に欺し得る悪黨？が一人でも居るかどうか。

現下に於ける駐支使臣の活躍

廣田は、最近の支那に就いては體驗がない、従つて支那に居た有吉の外交に對して批判の自信がなかつたのではないかと思ふ。有吉が有能で、現下の對支外交に最も適して居ると信じてゐたのは、廣田だけだといふ話である。兎角廣田には外交刷新の期待がかけられて居たので、僕等も廣田の人事には可なり注意を拂つてゐた。然るに彼の人事行政は幻滅の連続であつた。齋藤をアメリカにもつて行つた以外は、誰れが見ても平凡極まるものではなかつたか。同時にこれは、外務省に愛憎の盡きる程人物の拂底して居る證據にもなる。目下の支那の状態では誰れを駐支公使にしたところで、大した仕事は出来ない。従つて公使には誰れをもつていつてもいゝではないかといふ考へ方には、僕は大不賛成だ。廣田がどう考へて居たか知らないけれども、外務省の一部には確にこんな諦めのよい議論がある。今日の駐支公使の人的要素は、過去の懸案解決や小交渉の成立に一生懸命にならなくても、日支

關係の本質的改善に見識と手腕とを有する大局的な人物でなくてはならないと思ふ。有吉は果してこの條件にかなふたかどうか。質的に言つて、今の對支外交陣は寔に貧弱であるやうな氣がする。英國公使のカドガン、米國公使ジョンソンの潑刺たる活動力に比べて、日本の駐支公使の活躍は可なりスローである。これは目下の日支の關係によるであらうけれども、僕は日支關係がこうであればあるほど、公使の活躍は必要なものではなからうかと思ふ。

カドガンやジョンソン等が飛行機で、蔣介石に交渉に行き、或は軍艦で南方支那を視察するのに、有吉は悠々と大名行列で南京に行つて、觸りのよい汪兆汪、唐有任一點張りであつた。氣魄において、すでに押されて居た。

危険な南京外交のスポンヂ帯

斯う見て來ると、廣田は對支外交をシリーズに考へて居たか、どうかといふことさへ疑ひたくなるのである。流れに沿ふて舟を流して行けば、何時かは岸に着こうといふ老人らしい態度であつた。天羽聲明で廣田の抱負が見えたやうであつたけれども、あれは氣勢ばかりで、世界的には結局天羽ばかりの氣勢であるとされてしまつてゐる。

要するに、現在南京政府がやつてゐる外交整調の擬態の一面は、實に日本の軍部に向けられてゐるスポンヂ帯である。それを外務當局がいかに自分等に向けられたる誠意の表現かのごとく考へて、

虎の子のやうに大事にしてゐるのには危険である。外交當局相手にホントウに向けられてゐるものは裏面に於ける排日的劃策である。廣田がこの南京外交の二重性に正しい認識を拂つて居たなら、舟を流れに棹してノンキに構へて居ることは出来ない筈だつた。

——外交時報・昭和一〇・一・一五——

第六章 日支外交調整論の兩面

蔣の對日外交の目標

蔣介石が南京政府の行政院長になつてからの對日外交は、一つの目標のもとに、一絲亂れず日本に迫つて居る。その一つの目標は何かといへば、日本の對支外交を一元化させるといふことだ。これを更に端的に言へば、日本の對支外交は外務省の一筋槍にして、外部の容喙を許さぬ状態であつて欲しいといふことだ。南京政府の外交機關と日本政府の外交機關とだけで一切の日支外交問題を處理しやうといふことである。これは表面的に、看板通りに見、且つ南京政府の實狀を知らずに受け取ると、一應尤もなことであり、原則的には反對出來ないことである。日本にも有吉前駐支大使を始め多數の贊成者があるやうである。

蔣介石始め南京政府の政治家に言はせると、一體日本の誰れを相手にして交渉していか、とんと

判らない。此の一角に當つて見れば、こうだといふ、他の一角に當つて見れば、あゝだといふ、一つの事柄でも當るところによつて言ふことゝ爲すことが異ふ、これでは交渉しやうと思ふても交渉の仕方がないといつて居るのである。これは一應尤もの言ひ分のやうに思ふ。實情はさうであつたと思はれるのである。外務省は外務省の對支政策をもち、陸軍は陸軍の對支認識を持ち、海軍は海軍で意見をもちつてゐる。三省協議とか何とか言はれてゐるけれども、この三省は、ともすればイデオロギーを異にし、經驗を異にし、接觸する部面を異にしてゐる。なか／＼完全に一致すべくもないのである。一致するか如く見えて居るけれども、なか／＼一致しない。對支三原則などいつて仰々しくふり廻されて居るところの三省の決議事項なども、當局者の一部に、「あんなものは駄目だ」と輕蔑してゐるものが居る。自分等が決めて置いて、自分等が笑つて居るのだから世話はないのである。これはなぜかといへば、三省の役人が、その素養において、オリヂンに於いて相違してゐるからだと思ふ。更に平たく言へば支那を見る眼が異つてゐる。或者はナシヨナリズムの素養から、或者はインターナシヨナリズムの視角から、或者は對露作戰の土臺から、或者は對米戰略の見地から支那を眺むれば、自づと支那は異なつたものに見えなければならぬ道理である。何れも、支那と日本との關係をよくしやうといふ目標については一致して居るが、それを招來する手段即ち政策については、各自が自信をもつてゐる。この自信が強ければ強い程完全なる一致は出來難いやうに思ふ。僕は三省の完全なる一致による對支政策の一元化は、今の實情に於いては困難なものではないかと觀測してゐるのである。

對支外交が一元化されることは、理論的には望ましいことである。當然一元的であるべきである。理論的には、そうであるが、また國家の利益を損してまでも一元化の理論に従ふ必要は毛頭ないのである。日支の關係の實情に照らして尤もいゝ方法をとればいゝのである。その場合は百元化であつてもいゝわけだ。そこで血眼になつて一元化を叫ぶ必要もなければ、三元的であることを輕蔑すべき必要もないのだ。要はたゞ日支關係の現在に、最もいゝ方法をとればいゝのである。蔣介石の口裏をそのまま得意になつて喋々するのはどうかと思ふのだ。

對支外交一元化は可能か

蔣介石も勿論三省の完全なる一致の基礎に立つ對支外交の一元化が出来にくいといふ位のこととは知つて居るのである。出先の使臣や武官の態度や遣り方でこの位のことは感知してゐるだらうと思ふ。では、何故に南京政府が口を揃へて、日本の對支外交の一元化の必要を日本内地に放送するか、僕等は一寸考へさせられるのである。

上述のやうな實情の下において、日本の對支外交を完全に一元化する方法は、さし當り二つしかないやうに思ふ。一つは非常に偉い總理大臣が出て統帥するか、外相が確かりするか、今一つは、陸軍も、海軍も全然對支問題から手を引くか、この二つより外ないやうに思ふ。第一は今の日本には一寸望めさうにもないのである。岡田内閣が倒れて、廣田内閣が出来たが、最近の事件や、其の組閣振り

から察する時、結局岡田内閣以上のものは買ひ被れない。専任外相に誰がなつたつて同じことである。然らば、残されたるところは、完全に外務省の一本槍にするよりほかないのである。蔣介石の狙ふて居る獲物は實に日本をこんな状態に置くことである。

行政院長蔣に對する二様の觀測

一體蔣介石が昨年末汪兆銘の狙撃事件後行政院長として、南京政府の負責の表面に乗り出して來た理由に就いて、日本では二種の觀測が行はれた。一つは南京政府は内外政策行きづまり、殊に對日外交に切端つまつて居る、もはや蔣介石は窮地に押しつめられて出て來たもので、必らず眞底から對日外交の整調に乗り出すだらうと言ふのである。第二の觀測は、支那全體の經濟生活は頗る不安になつてゐるにかゝはらず、蔣介石の内部における統制力は頗る強くなつた。もはや内部において反蔣派の策動や、地方軍閥の對抗も許さぬ程度に強くなつてゐる。従つて蔣介石は自信満々として行政院長に乗り出して來たもので、對日外交も虚々實々巧妙な策を打つて來るだらうといふ觀測である。南京政府の情態を表面的に見ると、可なり切端つまつて居て、對日外交を整調する以外に蔣介石自身の政權が維持出來ぬやうに見える。米國の銀買上げによつて、南京政府の基礎地盤たる浙江財閥は破綻に瀕してゐる。南京政府の通貨改革は必らず失敗する。共產軍の勢力は次第に擴大するだらう。支那の農村は疲弊の極にある。英米の積極的援助は望めないなど、支那を悲觀的な眼からばかり見て來ると、

南京政府は可なり切端つまつてゐるやうに見える。對日外交關係を整調して日本にすぎりついて來るやうにも一應考へられるのである。だが南京政府といふものは、人民の犠牲の上に立つて來て居る。人民の幸福といふものを無視することが出来る故に、一つの政策が行きづまると次から次に自己政權保存のために有効なる悪る智慧が湧いて出るのである。奔放自在にこの悪智慧を働かし得るところ、蔣介石政權の一つの強味だと僕は思つて居る。近代國家の通念から行くならば、今の蔣介石政權は東三省を失ひ熱河を失ひ、北支を混亂に陥れた時、已に大なる創傷を受けねばならぬ筈で、近代國家の政府なら、これだけで已につぶれて居る。然るに微細に蔣介石政權を見ると、この國家的不幸な事件によつて蔣介石そのものゝ勢力は、内部的に大となつたといふ逆の現象が現はれて居るのである。具さに南京政府の内部關係を見ると、日本で思つて居るやうに蔣介石自身は切端つまつて居ない。最近においては可なりの餘裕さへ示して居ると見るべきであらうと思ふ。蔣介石が行政院長として乗り出して來た原因は、やつぱり第二の自己の地位に自信が出來たからだと僕は見る。

蔣の最も苦慮する日本の武力

蔣介石が行政院長になつて、一番頭痛にやんで居る外交問題は、何といつても對日問題であることは間違ひない。但し日本で思つて居るやうに蔣介石は血眼にはなつて居ない。日本の持つて居る一つの策さへ封すれば、南京政府の對日外交の路は自づと展開するといふことを知つて居る。高をくゝつ

て居る風があるやうに僕は見て居る。

その日本のもつ一つの策とは何であるかといへば、軍の實力行使である。これさへ封すれば南京政府は高枕である。どうかして日本の實力行使を封じて、外交を外交當局者同志の軌道に乗せやうと思ふのは蔣介石にとつて見れば自然の人情で、蔣介石たらずとも、いやしくも今日の蔣介石の地位に置かれるものゝ誰しも考へることゝ思ふ。自己保存の路である。

今日の蔣介石政權に致命的弱點があるかどうか、僕は現状に於いてはないやうに思ふ。過去の蔣介石政權は幾度びか危機に瀕したと日本には傳へられた。僕等はその都度南京の現地に居て、どうしてあんな馬鹿なことが言へるかなあと感心した位であつた。蔣介石政權は過去八ヶ年一度も危機に臨んだことなどはないのである。日本や、その他の近代國家の政權なら當然崩壊せなければならぬ總べての條件を備へながら、蔣政權は却つて強化する。日本で蔣介石政權は危機に瀕したと思はれた時は、實際においては蔣政權が強化の機會を捉へた時であつた。これは蔣政權に、近代國家の政權が持ち得ない特殊な性質を持つてゐるからだと思ふ。個人の場合でもそうだと思ふ。義理だとか人情だとか、恥だとか、外聞だとかいふものを忘れ去ると、人間の生活力はなか／＼強化されるものだ。そこらあたり居る生活力の強い手段を見給へ、多くは、これ等の厄介な感情、情燥を忘れて、心臓と神經の強大さに自信をもつて居るものばかりである。これ等の手輩は自殺や引退や、白狀は決してしない。蔣介石政權もこれに似たものだと思へるのが一番近い。

だがこの不死身な蔣政権にも痛いところはある。それは日本の實力で、どこか支那の一部を壓されることである。勿論蔣介石が強ければ、武力で對抗するだらう。だが、現今の状態では、まあ勝味はないと思つて居るのだらう。今の蔣介石にとつては日本と武力的に對抗することは、自己政権のかくされた急所を露出する結果になり、延いては自己政権倒壊の憂目を見ることになるから極力避けねばならぬ。これを逆に言ふと恐いものは日本の武力だけだといふことになるのである。

だから蔣介石が自己政権を安泰に保つて行くためには、この日本の武力に對して適當な手段を講ぜなければならぬ。金があれば思ひ切つた軍備擴張もしようが、それは今日支那の國力では追ツつかない。どうしても政治的に智慧を絞つて日本の武力を封ぜなければならぬ。蔣介石の對日外交は、いろ／＼と現はれて来るが、すべて右に根帯をもつものである。

蔣の「整調」論の概念的相違

支那からの報道や、蔣介石に會つた人の話では、蔣介石始め南京政府の連中は、ほんとうに日支外交の整調に乗り出そうとして居る。蔣介石が政権を保持して行くためには、日本との協調より外なことを覺つたのであるといつて居るのである。こゝまでは僕もほんとうであらうと思ふ。だが南京側から見て日支外交の整調とは何を意味するのであらうか、これは已に公式に明瞭にされて居る、日支平等の立場において。平和なる外交手段によつて、お互ひに主権を害することなく、相互扶助をや

らうといふことで、これを卒直簡明に南京側の立場から説明すれば、今までの日支關係は、不平等の立場において、支那の主権が害されて、日本の利益のみ圖られて居た日支關係であつた。それを、そんなことのない日支關係にしようといふのが、日支外交整調論の基礎であらうと僕は思ふ。

日本側から解釋すると、滿洲國の現實を承認し、北支の特殊状態を認め、排日を取締り、歐米の援助を求むることなく、日本を東亞の安定勢力と認め、日支の關係を整調しやうと言ふのであるから、「日支關係の整調」といふ文句の裏にさへ、南京は南京流の解釋をもち、日本は日本流の定義を下して居るのである。日本では蔣介石の言ふことを日本流に解釋するから、いかににも有難い言葉のやうに考へるのである。

「今度こそ、蔣介石は本気で日支關係整調に乗出すだらう」と、考へると日本人の頭の中には、直ぐに、この整調の概念が、日本人流に映き出されるのである。蔣介石が若し日支關係整調を考へて居るとすると、南京流の整調であつて、斷じて日本人流の整調でないことは間違ひないのである。

また、「整調」、「整調」と言はれるけれども、一體何を整調するのであるか。日支關係が不整調だとすればそれは南京政府の排日運動と、これに伴ふ日本の膺懲的行爲以外にはないか。日支外交を不整調に陥れたものは支那の排日運動である。日本は過去數百回に亘つて排日運動取締りの外交交渉を行つて居る。その度毎に支那當局者は日本の外交當局を愚弄して、日本國民を怒らした。その結果起つたのが日本の實力行爲である。支那に排日さへなければ、日本の實力行爲はあり得なかつた

位は小學校の子供でも判断がつく。それであるのに南京の當局や、支那人は、過去における排日に對する日本の外交交渉を愚弄したことは忘れてしまつて、宛も排日の原因が日本の實力行爲から來てゐるかのごとく思ひ込んで居るのだ。

而も最近における南京政府の言ひ分は、南京政府が日支關係調整に乗り出さうとしても、日本の對支外交が一元化してゐないので手の出しやうがないといつて居る。

現下の「日支調整」は成功するか

この際日支關係を調整することは是非必要だと思ふ。それがためには、必須な條件として、支那が日本に引ツばられても隨いて來る覺悟があるかどうかといふことである。過去の日支葛藤の正體は、強くなつた日本と、依然として弱い支那の對立である。強くなつた日本を承認せぬ支那と、強者の自然の力を押そうとする日本の對立である。支那は日本が強いことは好まない。どこの世界に、隣國に強國を持つことを喜ぶ馬鹿が居るものか。そこで、國際聯盟の力を頼らうとする。米・露・英の日本牽制力に頼らうとする。日本の經濟的發展を阻止しようとする。日本の強大になることを極度に恐れるのである。然も支那のこれ等の排日的感情に拘はらず、日本は支那に較ぶればすつと強くなつてしまつたのである。東亞の安定勢力たることを正々堂々と要求し得る自負を持てるやうになつた。この東洋における客觀的狀態を正視し、現實を正確に把握して、強いものに引きづられる覺悟が定まつた時

に、始めて日支間の關係調整が出来る時だと思ふ。だが支那の政治家にこんな大乗的な考へ方が出来るかどうかと思ふと甚だ覺束ない。怕らくこれはむづかしからうと思ふ。蔣介石などは、夢にもこんな覺悟はもたないと思ふ。斯うなると、いかに日支關係の調整は必要だと思つたところで仕方ない。

蔣介石は南京から日支關係の根本解決を圖りたいと放送し、日本でも、これに相應じて、何とか言つて居る。大阪漫才の懸合のやうなもので、現實の前には實に他愛のないものである。今のやうな状態で、日支關係の根本解決が出来たら、僕も南京政府の認識を變へねばなるまい。對支外交一元化も出来れば寔に結構なことである。どうしても出来ツこのない現状にあれば、幾ら一元化をいつたところで仕方ない。出来ることを土臺にして、物事を考へやうぢやないか。それが政治であり外交であるのだ。日本の目下の状態は、強力な内閣が必要であるといふことを皆んなが頭の中では考へて居る。それさへなか／＼出来ないでセイ／＼廣田内閣が出来たやうな實狀にあるではないか。國家主義と國際主義、自由主義と統制主義、いろ／＼な要素がこんがらがつて、相刻して居る。何れも負けず劣らず戦つてゐるのである。こんな社會に基礎をもつ政權が一體強力であり得るかと言ふのである。また今日の對支外交の根本解決や、調整が一元化ぐらいの外交形式の改善で、出来るものでない位のことには誰でも判つてゐるであらう。

要するに蔣介石の覗ふところは、日本の實力の發動、即ちオヴァー・パワーを何とかして喰ひ止めて、日支關係はお手柔らかな日本外務省と交渉して、その日その日の安易さを貪らうとすること

ある以外に、日本人流の整調などは考へて居なからうと思はれる。

——外交時報・昭和一一・四——

昭和十一年六月十七日 印刷
昭和十一年六月二十日 發行

蔣介石と現代支那
定價 一圓五十錢



著者 吉 岡 文 六

發行兼
印刷人 瀨 戸 進

東京市本郷區曙町十一
印刷所 東白堂書房印刷工場

東京市本郷區曙町十一

發行所 東白堂書房

電話大塚四九八五
振替東京六五六一〇



